リレー小説[すべてが丁になる]三周目

「谷ちゃん……谷、ちゃん……」
降り注ぐ豆腐から逃れるため教会に戻ってから、十五分ほどが過ぎても、万尋は泣き続けていた。
聖堂の中、少し離れたところに座る吉野もまた、彼女ほどの思い入れはないにせよ、相当の罪悪感をおぼえていた。
（……あのとき、俺が目を離さなければ、彼女は死ななかった）
先ほどから、同じ言葉が頭の中をめぐり続けている。そのたびに、それは重い実感となって俺を押しつぶす。
責任は、俺にある。年長者であり、この場所での彼女の保護者（と自覚している）であった俺が、ちゃんと彼女の手を引いていれば。急に走り出したりなんかしなければ、こんなことにはならなかったのだ。
「ごめんな……ごめんな……」
この言葉もまた、堂々巡りである。心の中で、（……あのとき、俺が）から始まり、この言葉で終息する思考のループが、彼の中で、教会の長椅子に座ってからずっと続いている。
そんな二人を眺める野花もまた、表情は固い。万尋の気持ちも、吉野の気持ちも、共に理解できる。
単純に、万尋には少し感心している。明らかに責任は吉野にあるが、それを無神経に責めることをしない。天真爛漫な娘（こ）だな、と思ってはいたが、どうやらそこまで子どもでもないらしい。もしかすると、悲しみが大きすぎて、責任追及などしている心の余裕がないだけなのかもしれないが。
あいつらを呪い殺そうとした私だが、今、人の死を目の当たりにして、心の中に些（いささ）かの変化が生まれ始めている。だって、そうだろう？　例えば、私があいつらを呪い殺すことに成功したとしよう。私は飛び上がって喜ぶだろう。ざまあみろ、と。でも、その裏では、私とは何の関係もない人たちが、こんなふうにして悲しむことになるのだ。そして、憎しみは連鎖する。その無情に、私は気付いてしまったのだ。
確かに、私は虐げられた。殻の中に閉じこもるしかなくなるところまで追い詰められた。でも、死んではいないじゃないか。生きているだけで、ただそれだけでいいじゃないか。生きてさえいればどうにだってできるんだ。死んだら何もできない。望まぬ、早すぎる死を迎えたあの娘のように。
「……二人とも。しょぼくれてたって仕方ないわ。今、私たちにできることを、探しましょう」
「……は？」
「……なっ？」
万尋と吉野は、虚を突かれたように、血相を変えた。
「何言ってるの、野花ちゃん！　谷ちゃんが……谷ちゃんが、いなくなっちゃったんだよ！　なのに、何でそんなに冷静になれるの！」
「そうだぞ、野花ちゃん！」
見おぼえがある。他人を否定する態度。表情。声。あいつらにさんざん浴びせかけられてきたものと、同じ。
でも、今の私は、あのときとは違う。真理を見出した私なら、胸を張って、反論できる。
「いいや、それは違うわ。こんなところでずっとメソメソ泣いてたって、何も変わりはしない。そんなこと、芽生ちゃんはきっと望んでない。
考えて。私たちは生きている。生き残った者には、先に進む義務がある。無事に元の世界に帰るっていう義務がある。私たちは、それを果たさなくてはならないわ。どうにかして、帰る方法を見つけないと」
「そんな、すぐに切り替えられないよ！　野花ちゃんは、谷ちゃんのことを何も知らないから、そんなにドライでいられるんだよ！　でも、私は違う……谷ちゃんと、ずっとずっと一緒だったの……すっごく、悲しいの。あんたみたいに、すぐには乗り越えられないんだよ！」
万尋は泣き叫んだ。だが、吉野は、意外にもすぐに気持ちを改めた。
「いや、万尋ちゃん。今は、野花ちゃんの言っていることが正しいよ。もし豆腐が止んだら、また外に出て、いろいろ探ってみようじゃないか。それまでは、この教会の中に、何かヒントがないか探そう」
「やだ！　私は、ここにいる！」
吉野が優しく語りかけても、万尋は頑として譲らない。ついには、背を向けられてしまった。
見かねた野花が、吉野に囁く。
「これ以上言っても仕方ないわ。彼女は、芽生ちゃんと一番近しかった人だし……そっとしておいてあげましょう。教会内の探索は、私たちだけで」
「……そうだな」
了承した吉野は、再び万尋に声をかける。
「わかった、万尋ちゃん。教会探検は俺たちだけでやることにするよ。でも、その間君（きみ）は、ここを動かないでくれ。……芽生ちゃんみたいなことは、もう二度と引き起こしたくない」

「……わかった」
　こちらを振り向きもせず、万尋はつぶやいた。
「よし、そうと決まれば話は早いわ。二手に分かれましょうか。どうする？　どのあたりを探したい？」
「俺は、倉庫を見たいな。面白そうな匂いがぷんぷんしている！」
　吉野は気分よさそうに答える。先ほどまで落ち込んでいたのが嘘のようだ。
　その様子に少し引きながらも、野花は提案を返した。
「あ、そう……じゃあ、私は牧師さんの部屋あたりを見てくるわね」
「了解した。何か面白いものを見つけたら、すぐに呼んでくれよ？」
　念を押して、吉野は倉庫の方へと消えていった。

□

「ふう……」
　牧師の部屋を見つけて数分。野花は手当たり次第に引き出しや本棚を漁っているが、大したものは見つからない。
　少し疲れたので、暇つぶしに本でも読もうと（幸いなことに、全て日本語で書かれていた）、床にひっくり返したところの本の山から、目ぼしいものを探る。すると、
「『白街（しろまち）古代文明に関する研究』……何これ。ちょっと面白そう」
　著者はアーネスト・ウォルフガング。当然知らない名だ。後ろのページの作者紹介欄を見ると、『考古学・哲学・神学・物理学・医学・ウイルス学研究の第一人者』と書いてある。なかなかの天才らしい。
「ふむふむ……」
　ざっと読んでみると、これが想像以上に面白かった。時間が惜しいので見出しと気になったところしか読まないが、大体の流れから察するに、『白街古代文明』とやらは約３０００年前に現在の『白街』と呼ばれる場所に存在していた文明で、そのテクノロジーは現代の技術（この世界での技術が一体どれほど発達しているかは分からないが）を大きく凌駕し、魔法に近いことも行えたらしい。そして彼らは、この世界とは異なる異世界を発見し……。
「え、ちょっと待って！？」
　気になった野花は、そのまま読み進めていく。
「異世界を発見した彼らは、現在に残る遺跡の、塔らしきものの地下から、世界間の移動を行っていた。ただ、その詳しい方法は現在でも解明されていない。白街郊外の石碑に現代語訳が記されている彼らの詩の中に、そのヒントが隠されているのではないかという説が有力である……」
　きた。これだ。私たちをこの世界に送り込んだ、いや呼び寄せた犯人は、この古代文明の力を利用していたのだ。つまり、この本に記された『白街』という場所に行き、石碑の謎を解けば、私たちは元の世界に戻れる！
　心躍る野花が、勢いよく立ちあがった、その時だった。
「うわあああああああああああああああああああああああああ！？」
「！？」
　吉野の叫び声だ。本を持ったまま、野花は即座に倉庫へ向かう。
「どうしたの、吉野さん！」
　倉庫まではそれほど距離はなく、一分もしないうちに野花はそのドアに辿り着いた。
　ばんっ、とドアを開けると、そこには倒れている吉野、得体の知れない機械、そしてその機械から投影される、眼鏡をかけた壮年の男性の、顔のみの立体映像があった。
「な……何よ、これは……」
「わからん！　面白そうなものがあるなと思って、適当にいじくっていたら、突然……」
　吉野と野花が戸惑っていると、その映像の壮年は、ゆっくりと口を開いた。
『私の名はアーネスト・ウォルフガング。まずは、これを再生してくれたあなたに、お詫びしたい』
「……アーネスト・ウォルフガング！？」
　野花はシンプルに驚いた。まぎれもない、この本の著者ではないか！
『きっと、あなたは私が強制的にこの世界に呼び寄せた人だろうから。本当に、勝手なことをしてしまった。だが……どうか、憤慨せずに聞いてほしい。
　もう知っているだろうが、この世界には、植物以外の生き物はほとんどいなくなってしまった。その理由を説明したい。そしてあなたに、いやあなたたちに、この世界を救ってもらいたいのだ。
　一年ほど前……私は、不死の研究に携わっていた。ウイルスを根本とした新生物と融合することで、身体の老朽化を止め、永遠の肉体を手に入れる……夢の研究、と当時は思っていたよ。
　だが、その『T』ウイルスが完成した時だった。突如、研究所が何者かの襲撃を受け、厳重に保管する予定だったウイルスが、誤って散布されてしまったのだ。それでも最初は、不死になれるのだからいいではないか、と思った。だが……『T』ウイルスは、実は完成していなかった。ウイルスに感染した者は、五時間程度で身体が豆腐になり、崩れ落ちたのだ！
　幸い私と数人の研究員は、念のため開発されていたワクチンを打ったので

助かった。しかし、ウイルスは空気感染型だ。恐るべきスピードで、それはこの世界を侵略した。ワクチンの量産は追いつかなかった。大勢の人が死んだ。すべてが、『T』になっていったのだ。

かなり甚大な被害があったものの、もともとワクチンがつくられていただけあって、量産が追い付けば、人類は滅亡を免れる。破滅は終わったかに見えた。だが、ここで第二の問題が浮上したのだ。

人々の死骸である豆腐は、生きていたのだ。それは、触れた者を豆腐に変えた。満杯の死体置き場に積み重なっていた豆腐は、何体も、何十体も、何百体も融合し、やがて動き出した。

豆腐の化け物が、世界中の都市を襲った。世界のいかなる軍隊も歯が立たなかった。なにせ、撃っても撃っても融合して再生するのだからな。唯一効いたのは核くらいだが……あんなものを何発も落としていては、奴らを殲滅する前にこの星がなくなってしまう。結果、人類は地球を捨て、開発が進み始めていた火星に移り住むことになった。

明日が、火星への最後のロケットが発つ日だ。だが私は、黙ってこの星から逃げるのは気に食わない。そこで、同時に進めていた古代文明の研究を利用し、異世界からあなたがたを呼び寄せることにしたのだ。それぞれの世界で、絶大な『影響力』を持ちうる英雄たちを、だ。

本当に申し訳ないと思っている。しかし、どうか、どうか良心に従って、私たちの世界を救ってはくれないだろうか！

いや、ただ救うと言っても分からないだろう。具体的にやってほしいことは、あの豆腐の化け物どもの殲滅だ。奴らは今、どんどんと融合し、世界に数体程度の数となっている。だがその分、一体一体がとてつもなく巨大だ。この間もどこかの国が核を落としたが、それでも身体の半分を吹き飛ばせるほどでしかなくなってきた。こうなればもう、人知を超えた力を持つあなたがたに委ねるしかない。この世界は、あなたがたにしか救えないのだ！

あとは、何だったか……あ、そうだそうだ。私も、あなたがたに任せきりというようなことは、少々気が悪かったので、一縷の望みとして、最終兵器をひとつ用意してある。ここから北東に五キロほど行った、大きな街の地下に、それはある。私の手に余るもので、開発しておきながら私には使うことができなかったのだが、あなたがたには扱えると信じている。

ちょうど、今から数日後に、全ての化け物が中心街……先ほど言った、大きな街に集まるという予測が立っている。君たちの転送と同じ時期だ。あ、転送が遅れるのは、不特定多数の、それも抽象的なイメージしか私が装置に入力できなかったからでね。それは申し訳ない。それはそうと、おそらくそこで、奴らは最後の融合をするつもりだ。そこを、私の用意した最終兵器も使って、あなたがたに叩いてほしいのだ。

それでは、よろしく頼む。あなたがたに、神のご加護があらんことを』

ぶつっ、と映像は途切れた。

「……どうする？」

野花が問う。

「……決まっているじゃないか！　俺達で、この世界を救うんだ！」

「言うと思った……」

吉野の目は爛々と輝いていた。呆れたように、野花はつぶやく。

「吉野さんって、普通の人間でしょ？　それなのに、巨大な豆腐の化け物……信じられないけど……に、どうやって立ち向かうっていうのよ？」

「なあに、なんとかなるさ！　俺自身はただの人間だけど、面白いものに出会ってきた経験はある。けっこうあぶなっかしいこともあったんだぜ？　でも、それでも毎回なんとかなってきた！　だから、今回だって大丈夫だ！」

「……呆れた。その調子じゃ、あの映像でこの世界からの脱出方法が語られていなかったことも、気づいていないんでしょう？」

「はっ……そ、それは盲点だった……」

野花は頭を抱えた。こんな調子で、世界を救うなどと抜かしているのか。

「まあ、それについては問題ないわ。この本に、かなり大きなヒントが書いてあったからね」

「ん、何だそれは――っ！？　『著者：アーネスト・ウォルフガング』だとっ！？」

興味深そうに野花の左手の本をのぞきこんだ吉野は、大きく後ずさる。

「何もそこまで驚かなくてもいいと思うけど。ええ、この本を書いたのは、さっきの男性よ。この本によると、『白街』という場所に、先ほども語られていた、世界間の移動を可能にする古代のテクノロジーが遺されているらしいわ。あの男性がここにメッセージを残したのは、おそらく私たちを転送したのと同じ日。つまり、『白街』はそう遠くない場所にあると推測できる。となると、巻末に記されていた遺跡のアクセス情報から考えて、ここは『マイナ村』、あの男性が言っていた『中心街』は『ニュー・シュベルツ・シティ』。そして、『白街』はその中心街からさらに北東一キロほどの地点にあるわ。直線距離で、おそらくここから五・五キロね。私と万尋ちゃんはここへ向かうわ」

「えっ！？　一緒に世界を救わないのか！？」

解せぬ、と吉野は首をかしげる。

「……あのね、吉野さん。あなたはいろいろファンタジーな体験をしてきたかもしれないけど、所詮私たちはただの人間なの。私に至ってはいじめられ

っ子よ？　確かに良心に訴えかけるものがないわけじゃないけど、そうしてやる義理なんか全くないわ。今は、帰ることを最優先に考えたい。……それと私たちは、既に『T』ウイルスに感染している可能性がある。発症は感染からたったの五時間なのよ。今でちょうどこの世界に来て一時間ほどだけど、白街に行くまでに、徒歩なら五十分ほどかかる。そこから私たちは、最短でたったの三時間十分で、石碑の詩からあの天才学者が解き明かすのに数年かかった脱出方法を読み解かなくっちゃあならないのよ。現実的に考えて、怪物と戦ってる時間なんてこれっぽっちもないわけ」

「まあ……それは、そうだが……」

「お分かり？　それじゃあ私、何か乗り物を探してくるわ。豆腐も止んだみたいだし。他に役立ちそうなものがないか、探しておいて」

無愛想に言い残して、野花は吉野にくるりと背を向け、倉庫から出ていった。

「……ああも言われっぱなしでは、少々腹が立つな。よし、俺一人でも世界を救ってやるぜ！」

吉野の目は、再び好奇心の光に満たされ始めていた。

□

「う……わあ……」

ところ変わって、中心街『ニュー・シュベルツ・シティ』。スタート地点のオフィスビル、地上三〇メートルほどの階層にある応接間でくつろいでいた恵奈は、年甲斐もなくあんぐりと口を開けていた。

そもそもの異変は数分前だ。突然、空から豆腐が雪崩の如く降ってきたのだ。その時も驚きはしたが、屋内にいれば安全かと、その場を動くことはしなかった。

だが……豆腐の降りが激しくなった時、雲を割って、それは現れたのだ。

とてつもなく巨大な、白い物体。全長はゆうに数百メートルを超し、背からは翼を生やした、断頭された人の上半身のような何か。それが羽ばたくたびに、豆腐がそこら中に撒き散らされているのだ。

三千年の時を生き、いろいろな神にも怪物にも出会ってきた。天界の最高神ゼウスは、ここいらの高層ビルほどに大きかったし、悪魔の王ルシファーは上半身だけで東京ドームを占領できるほど巨大だった。何より恵奈の夫・魔神テュフォーンも、本来の姿では山一つを軽々越える大きさだ。

だが、信じられないことに、これはそういった超自然的なものではない。ただの生物なのだ。

「こんな……巨大な、生き物が……」

ただただ、圧倒されるばかりである。神々しくもあるその姿に、恵奈は驚きを通り越して見惚れはじめていた。

だが、だんだんとそれが近づくにつれ、恵奈は気付いた。

「……あれ。もしかして、ここに着地する気じゃないの？」

今はまだ、かなり高い所にいるが、明らかにそれはこちらに向かって降下してきている。降り注ぐ豆腐の雨も、だんだんと強まっている。

恵奈は即座に翼を生やした。が、

（……あ、やっちゃった）

背中の、翼を出し入れするためのボタンを開けるのを忘れ、もともと恵奈のワガママすぎるスタイルによって軽く悲鳴をあげていた服が、ついにバリッと音を立てて破れてしまった。

（……ええい！　こうなったら、どうとでもなればいいわ！）

吹っ切れた恵奈は、ついに決断した。

突如、恵奈のジーンズと、その下の黒の下着が消滅する。また、どうにか破損を免れたブラも、同じように消え、彼女は一糸まとわぬ姿となった。

その直後、変態が始まった。下半身に、紫がかった黒色のウロコが生えはじめ、肉感的な脚が、だんだんとひとつに融合していく。また、艶やかな黒髪の間から、牡牛のような白い二本の角が、にょきりと顔を出す。もともと色の薄い瞳は、みるみるうちに黄色く染まり、瞳孔が猫……いや、蛇のように細くなる。

融合した脚が、大蛇のように太く長く伸びていき、それは彼女が人の姿をしていた時の身長の三倍を少し越えたところで、成長を止めた。最後に、宝飾のたくさんついたかなり際どい腰巻と、申し訳程度に乳首を隠す、歪（いびつ）な星形のアクセサリーが出現したところで、彼女の身体の変化は止まった。

これこそが、怪原恵奈の真の姿。その瞳は未来を映し、その焔は全てを灼き尽くす、半人半蛇の有翼魔神・エキドナである。

変態を遂げた恵奈は、大きなガラス窓を、拳でバリンと叩き割る。そして何の躊躇もなく、そこから飛び立った。

（あんな化け物、相手にしてはいられないわ。一刻も早くこの世界から離脱しないと）

降り続ける豆腐を器用にかわし、恵奈は一直線に街の出口を目指す。ちょうど離れたところ、白い街の逆の方向に、小さな村が見える。ひとまずはあそこに逃げ込むとしよう。

だが、そう思った矢先のことである。
「おおっ！？　なんだぁあれは！　まさか、豆腐の化け物の手下か？」
「！？」
数百メートル離れた前方。原付バイクらしき乗り物に乗った、一人の男性が、声を張り上げたのが聞こえた。
恵奈の超人的視力、そして聴力では、彼の詳しい様子が見て取れる。外見的には、大学生くらいだろうか？　その青年は、恵奈を凝視しながらこちらに向かってくる。つまり、幸か不幸か、彼には恵奈が見えている。
が、恵奈はそれを幸運と捉えた。
「わ、何だ！　こっちに向かってくるぞ！」
青年は原付のスピードを落とす。恵奈が車体のすぐ前に着地したところで、なんとか原付は止まった。
「あ、あんた、何するんだ！　危ないじゃないか！　……見たところ、人間じゃないみたいだけど」
「お察しのとおりよ。でも、説明はあとにさせて。今、あの街に向かうのは危険すぎるわ！　すぐに元来た場所に引き返しなさい！」
真剣に、恵奈は青年に語ったつもりだった。だが、青年はニヤリと笑い、答えた。
「悪いけど、それはできませんね。あなたが言っているのは、あの豆腐の化け物のことでしょう？」
「ええ、そうよ。じきに、あの街は壊滅するかもしれない。だから、今行ってはいけないわ」
「いや……だめだ。それじゃあ、俺たちがこの世界に呼び寄せられた意味がないんだ」
「……どういう意味かしら」
少しイライラしながらも恵奈が尋ねると、青年は語り始めた。自分は吉野といい、恵奈と同じようにこの世界に呼び寄せられた者であること。そして、教会で自分たちを召喚した者のメッセージを聞き、あの怪物を倒すため、中心街に向かっていること。中心街の地下に最終兵器があること。また、ここから近い『白街』という場所に、この世界からの脱出のヒントがあり、そこに仲間が向かったこと。そして、自分たちには最低で五時間の時間制限があること。
「なるほど、話は分かったわ。でもやっぱり、あなたには危険すぎる」
「そんなことないです！　俺は、あなたみたいな存在とは、これまでにも何度か遭遇してきた経験があるけど、全部どうにか切り抜けてきた！　……あれ、これついさっきも言ったような気がするな」
「なるほど。だからわたしを見ることができて、また、わたしの姿を見ても、そんなに驚かなかったのね」
「ええ、そういうことです。……ちなみに、あなたはどういう怪物なんですか？」
少年のように目を輝かせて、吉野は聞いてきた。少し戸惑いながらも、恵奈は答える。
「あ、ああ……わたしは怪原恵奈。真の名はエキドナよ」
「何、あの『怪物の母』！？　ギリシャ神話史上最強の怪物・テュフォーンの妻で、その間に多くの子を産みながらも、英雄ヘラクレスと姦通したり実の息子のオルトロスとも母子姦した、あの神話内でも指折りのビッチ……ごはぁ！」
熱い吉野の語りは、恵奈の鉄拳に遮られてしまった。吉野は原付の座席から吹っ飛ばされて、数メートルほど地面を転がった。
「話に尾ひれがついているわ。そもそも、ヘラクレスは今の夫に会う前の元カレなの。別にそういう関係があったっておかしくないでしょう」
「へ、そうなんですか？　じゃあ、オルトロスとの母子姦の話は」
「黙りなさい」
「ごへぇ！」
今度は丸太のように太く重い恵奈の尾が、吉野を打った。再び、彼は吹き飛ばされる。
「かはぁ……ほ、骨が折れたような気が……」
「……あ、ご、ごめんなさい！　少々、我を忘れてしまって」
恵奈は、少し飛んで吉野を回収し、再び原付に座らせる。
「はあ……気をつけてくださいよ、俺はただの人間なんだから……」
脇腹を押さえて、吉野は苦しそうにつぶやく。
そして、キッと恵奈を睨む。
「それで……恵奈さんも、俺を止めるんですか」
そう考えるのも当然だった。この世界に来るまでも、来てからも、俺のやりたいことに賛同してくれた者はそうそういない。
すると、意外にも恵奈は、女神のように微笑んだ。
「いいえ。わたし、あなたみたいな男の子は、つい手助けしてあげたくなってしまう性格なの。ぜひ、協力させてほしいわ」
「！　本当ですか！　いやーそれはありがたい！　『怪物の母』が味方についてくれるなら、百人、千人、万人力だぜ！」
「そう？　うれしいわ♪」
この数分だけで、彼らの間には強固な信頼関係が築かれていた。同じくこ

の世界を憂う者。それ以外に、信じる理由はいらない。
「そうと決まれば、この先どうします？　恵奈さん」
「そうね……じゃあ、吉野くんには当初の予定通り、地下に眠る『最終兵器』とやらを探してもらおうかしら。それまで、私がアレと戦うわ」
「……！？　そんな無茶な！　いくら恵奈さんでも、それは」
「大丈夫よ。こう見えてわたし、けっこうパワーがある方なの。久しぶりに腕が鳴るわ」
　蛇のような瞳の奥に、ゆらりと野性的な光が灯るのを感じ、吉野は少し寒気をおぼえた。
「……分かりました。じゃあ、俺はもう行きます。恵奈さんも、気をつけて！」
「ええ。おばさんに、どーんと任せておきなさい！」
　原付のエンジンをかけ、吉野は再び走り出す。――と、突然彼は停止した。
「？　どうしたのー！」
「恵奈さんはおばさんなんかじゃありませんよー！　『お姉さん』で十分通用します！　それじゃ！」
　それだけ言って、吉野は走り去っていった。
「……あはは。今日はよく、面白い子に会うわね」
　恵奈は気のすむまで吉野を見送り、やがて、標的に視線を向けた。
「こんな大きな戦い、何時以来かしらね」
　巨大な豆腐の化け物は、街を破壊し始めていた。その身は崩れ落ちながらも、ビルをたたき折り、高速道路を押し潰し、思うがままに暴虐の限りを尽くしている。
「待ってなさい。すぐに、粉微塵にしてあげる」
　気合を入れるようにそう呟いて、羽ばたこうとした時だった。
　突如、東の海岸線の方で、巨大な水柱が上がった。
「……え」
　柱のなかから出現したのは、歪な形をした、人型の巨大な何か。見た目としては、今もなお中心街で破壊行動を続ける『翼』の怪物に近い。だが、こちらは下半身があり、何より身体の色が、薄いベージュなのだ。……まるで、高野豆腐のように。
「嘘でしょ……もう、二体目が現れるなんて……」
　アレが複数体存在することは吉野から聞いていたが、まさかこんなにも早く現れるとは思っていなかった。
　呆気にとられていると、今度は『高野豆腐』のすぐ近くで、再び水しぶきが上がる。
　現れたのは、『クジラ』のような物体。高さとしては『高野豆腐』の半分ほどだが、全長がとてつもなく長そうだ。
　間髪いれず、今度は後ろ……先ほど恵奈が目指していた農村のほうで、土砂が大きく崩れる音がする。反射的に振り返ると、今度は『亀』のような巨大な怪物が、山を破壊しながら現れた。
　そして、最後は南東。地響きを立てて、地平線の彼方を歩いているのは、ティラノサウルスのような怪物。これが最も巨大で、身長は『高野豆腐』の一・五倍……1キロメートルほどもある。一歩進むたびに地面にひびが入るのが、この位置からでも確認できる。
「そん、な……あれを、全部……！？」
『絶望』という言葉が、ふいに恵奈の頭をよぎるのだった。

□

「あっはははははは！　まさかあの茶色い地面が、こんな巨大な怪物だったとは！　最高に面白い！」
「笑ってる場合じゃないですよ、先生！　幸い、この街には向かってないみたいですけど」
「そうですよ、木埜さん……は、早く、ここを離れるべきでは」
　謎の箱の中身を持ったまま、白い街の公園らしき場所のベンチでくつろいでいた木埜と広津、そして彼らに遭遇し行動を共にしている樹は、高野豆腐の怪物の出現に度肝を抜かれていた。
「ははは、ほらな広津君、紫堂君！　やはり、私の行くところには面白いものが現れる！　うわっ、見ろ！　海からもう一体出現したぞ！　あれは何だ？　クジラか？　わはははは、最高だ！　どうだ、近くに寄って見てみないか？」
「何を言ってるんですか。即座に踏みつぶされて終わりですよ、きっと」
　広津は心底呆れかえっていた。まったく、ここまでこの人が変人だったとは。僕なんか今、震えが止まらないっていうのに。
「いや、私は見に行くぞ！　待ってろ、高野豆腐の巨人！」
「あ、ちょっと！　待って下さい！」
「はあ……俺は知らねえぞ」
　木埜は席を立ち、広津と樹を置いて走り出す。
　そして、二人の見守る中、
「あっぶなぁあ――――い、どいてぇ――――――――っ！！！！！」
「む？」

「え？」
「あ？」
彼は、突如走ってきた軽トラに撥ねられた。
「「……は？」」
急停止した軽トラ、そして二の句が継げない広津と樹をよそに、木埜は五メートルほど宙を舞い、同じ距離だけ地面を転がった。
「だ、大丈夫ですか！？」
二人が未だ状況を理解できないでいると、軽トラから、高校生くらいの二人の女の子が降りて来た。気の強そうな子と、明るそうな子だ。降りて来た座席から察するに、どうも気の強そうな子が運転していたらしい。
「ほら、やっぱり免許もないのに運転なんて無茶だったじゃん！」
「……でもあなた、徒歩で五・五キロ歩く気になった？　車なんて、アクセルで進んでブレーキで止まってハンドルで曲がることさえ知っていれば簡単なもの……と、思ってたけど。案外、そう単純なものでもなかったようね」
「冷静に反省してる場合じゃないでしょ！　だ、大丈夫ですか？」
倒れた木埜に、少女たちは駆け寄る。そこでやっと、我に返った広津と樹も彼のもとに辿り着いた。
「君たち、うちの先生に何してくれてるんだ！」
「「……すいません、悪気はなかったんです」」
「悪気があるとかないとかで済む話じゃないだろこれは！　全く、どうしてくれるんだよ！　先生、大丈夫ですか？」
広津が呼びかけると、木埜は突然パチリと目を開け、むくっと起き上がった。
「大丈夫だ」
「「「マジか！」」」
少女二人と少年一人、そして青年一人は、仲良くハモる。
「いやいや、そんなわけないだろ！　あれだけ吹っ飛んだのに！」
「いや、それがどうも打ちどころが良かったようでね。すり傷ひとつ負っていないよ」
「何この人、怖い……」
「ええ……まさか無傷だとは……」
女子高生二人も若干引き気味である。
「……にしても、君たちのような年端もゆかぬ女の子が、なぜこの古ぼけた軽トラなどを運転していたんだい。いや、実は本業はトラック野郎だったというのかもしれないが」
何事もなく訪ねてくる木埜に、明るそうな子は不審がるような視線を送っていたが、気の強そうな子は、まともに答えてくれた。
「いえ、そういうわけではありません。私は白草野花、こっちは万尋ちゃんです。実は、これこれこういうわけでして……」
野花は、自分たちがこの世界に来てからの全てを、かいつまんで説明した。どうやら木埜はけっこう頭の回る性格らしく、途中に何度か質問を挟んできて、要約しながらも全部を説明し終わるのに、五分程度は使ってしまった。
「……なるほど。つまりここがその本に記されていた『白街』で、ここにある石碑の詩の謎を解き、塔のような遺跡に行けば、私たちは晴れて元の世界に戻ることができるというわけか」
「私も未だに信じられませんが……これ以外に、手立てはないように思えます。そこでなんですが、どうか、碑文の謎を解くのに協力していただけませんか？」
「？　なぜだ」
唐突な野花の提案に、木埜は質問で返す。
「いまお話（はなし）して、木埜さんはとても頭脳の使い方が優れていると感じました。もしかすると、アーネストが私たちに語らなかった碑文の謎を解ける、唯一の人材かもしれません」
野花は非常に冷静だった。大した感情もなく、淡々と話した。
木埜は、少し悩んで答える。
「だが断る」
「ナニッ！？」
思いもよらぬ答えに、冷静だった野花は、図らずも声が裏返ってしまう。
「なぜですか！　先生は、元の世界に帰りたくないんですか！？」
広津も、『信じられない』という顔で木埜を見ている。木埜を怪しんで何も語らない万尋も、あまり話したくない樹も、同じだ。
「考えてみたまえ。この世界以上に面白いことが、元の世界にあるか？　巨大な高野豆腐の化け物がその辺を闊歩したりするか？　未知のテクノロジーを持った超古代文明が存在したりするか？　いや、全て存在しない。あんな退屈な世界になんぞ、もう戻らなくてもいい」
「ああ、駄目だ……」
野花は強烈な既視感に襲われた。この人は、吉野と同じタイプの人間だ。あの、私の方針を無視して勝手に中心街へ向かった吉野と！　……ああ、思い出すだけで腹が立つ。
「でも先生。僕たちは、あと最短四時間程度で豆腐になってしまうんですよ！　特に僕たちは、スタート地点があの化け物の体表でしたから、真っ先

にウイルスに感染している可能性が高いです！　なのに、協力しないんですか？　数時間後に確実に死ぬと分かっているのに！」
「……あのな。元の世界に戻っても、私たちは同じ時間に、同じ死を迎えるんじゃないか」
「？　どういう意味ですか」
　木埜の意味深な言葉に、四人は首をかしげる。
「誰が、元の世界に戻ったらウイルスが体内から消えてくれると言った」
「「「「！」」」」
　そして四人は、同時にハッと気付いた。
「そうだ。結局私たちは、『T』から逃れることはできないのだよ。死ぬのは同じだ。いや、私たちが元の世界に戻るということは、そのウイルスを持って帰ってしまうということだ。感染力は爆発的なのだろう？　結果、私たちの世界は、この世界と同じように『T』によって滅んでしまうだろう。戻るべきではない、とまで言える」
「そん……な……」
「じゃ、じゃあ私たちは、ここで死ぬしかないってこと？」
「んなの、信じられるかよ！」
　広津と万尋、そして樹は、絶望を隠せなかった。だが、野花は希望を捨てない。
「待って、まだ分からないわ。もしかすると、どこかにワクチンが残っているかもしれない。それさえ打てば、まだ望みはある！」
　必死で見つけた一縷の望み。しかし、それすらも木埜は否定した。
「私たちは、それで助かるかもしれないが……元の世界に戻るまでに、完全に体内のウイルスを除去できるとは思えないな。結果、自分たちの世界にウイルスを持ちかえることに変わりはない。仮にたったの数時間でウイルスが体内から消え去ったとしても、私たちの衣服には既に膨大な量のウイルスが付着していることだろう。その全てを除菌し、一匹もウイルスを連れずに元の世界に戻るというのは、もう魔法でも使わない限り不可能だろうな」
「……。」
　ついに、野花は言葉を返せなくなった。それを見取ったのか、木埜はニヤリと笑って続ける。
「そもそも私は、君の考えには賛同できないな。人が助けを求めているのに、なぜ無視する」
「……だって、あんな化け物に勝てるわけがないでしょう」
「それこそ、やってみなくては分かるまい？　アーネストとかいう学者は、中心街の地下に『最終兵器』を遺したのだろう。だったら、私はそちらに行こうと思うがね。無為に死のカウントダウンを待つよりは、世界を救った英雄として死にたい」
「……」
　反論できない。『義理』や『筋』を通すというのなら、木埜の言っていることは正しい。しかし、あの化け物を倒せるとも、到底思えない。その自分の意思を分かってもらえないのが、野花は悔しかった。
　勝ち誇ったような木埜は、続けて皆に問いかける。
「さて、君たちはどうする？　私と共に、この世界に殉じた英雄になるか。それとも……」
　否、問いかけようとした。
「この臆病者と共に、自分の世界を滅ぼしても生きたいと思ごへえ」
　最後の二文字ほどを言い終える寸前、真上一メートルほどの空中に出現したものが、彼を地面に叩き伏せたのである。
「あいててて……あれ、おっかしいなぁ……私、食堂で麻婆豆腐を食べてたはずなんだけど……ん？　あなたたち、だれ？」
「「「「こっちのセリフじゃあああああああああ！！！！」」」」
　彼らの前に現れたのは、高校生くらい……ちょうど、野花や万尋、樹と同じ年頃の、ポニーテールが良く似合う小柄な女の子だった。
「私？　私は、楓コノハ。肩書きは一応、「魔導士（まどうし）」ってことになるかな」
「ま、魔導士！？」
　突如、空（というには低すぎるが）から降ってきた、魔導士と名乗る謎の少女。彼女が、この世界に来た者全員の運命を変えることになるとは、まだ誰も知らない。

□

「くそッ、止まれ！　止まれよぉッ！」
「無駄だアヤメちゃんっ！　あいつには、君の力は通用しない！」
　再び、中心街。結局白い街では誰とも会えず、十分ほど前にここに移動してきた理人とアヤメは、迫りくる『白』の恐怖から、必死で逃げ続けていた。
　屋内にいては、建物が破壊されて絶命する。かといってこのまま屋外にいても、落ちてくる瓦礫（がれき）や豆腐、もしくはあの怪物の攻撃を喰らって死ぬ。他に、どこか逃げ場はないか。どこか安全な場所は……。
「止まれ！　止まれ……止まれえ！」

アヤメは、パニックに陥っている。とても正常な判断ができる状態とは言えない。
（俺が、守らなきゃ）
そう、無条件・無意識に心の中に浮かんだ言葉に、理人はふと疑問を感じた。
近いうちに、俺にはこの子の未来を選択しなくてはならないときが訪れる。そこで彼女を選ばず、彼女が俺に殺されるよりは、今ここで死んだ方が、彼女にとっては幸せなのではないか？　それに、次の審判で彼女を選んだとしても、その次の審判にも、彼女は参加させられるかもしれないじゃないか。果たしてそのときにも、俺は彼女を選ぶと言い切れるか？　結果的に、彼女はそう遠くない未来に死んでしまう運命にあるんじゃないのか？
理人は、唐突に立ち止まった。
「止まれ、止まれ……！？　どうしたリト！　なんで、お前が止まるんだ！」
彼女は、俺を愛している。そう定まっている。その俺に殺されることこそ、彼女にとっての最大のバッドエンド。でも、ここで死んだなら、俺が殺した事にはならない。俺があとから罪悪感を負うこともない。これこそ、二人にとって一番幸せな結末じゃあないのか？
「ほら、何してる！　お前は、止まってちゃだめだろ！　リト！」
あいつに選ばれてしまった時点で、俺も、彼女も、すでに詰んでいるんだ。逃れることはできない悪魔のゲームに翻弄されて、そして死んでいく。なら……せめて、ゲームオーバーになる前に、このゲームから退場させてあげるべきなんじゃないのか。多少手荒にでも、俺に看取られて、安らかに――
「リトぉ！」
「がっ！？」
そこで、理人の思考は遮られた。アヤメの平手が、彼の頬を打ったのである。
「な……っ」
「立ち止まっているんじゃあないぞっ！　リトが死んだら、私……私、もうどうしていいか……」
アヤメの声に嗚咽が混じったところで、リトは、初めてまともに彼女の顔を見た。
涙でぐちゃぐちゃだった。鼻水も出ている。頬は上気し、汗もかいている。必死でここまで走ってきて、もうバテバテだ。
無様ともとれるその様相。だが、理人はそこに、力強い『思い』を感じた。『生きたい』という意思である。全ての人間が、いや全ての生物が持つ、強い本能。そして感情であり、欲望。
悶々とした理人の思いは、だんだんと晴れていった。なんだ、答えはこんなに簡単だったんじゃないか。誰だって、生きたいのは変わらないんだ。みんな、必死で生きているんだ。
なら……もう、やることはひとつだ。
「そうだね、アヤメちゃん……ごめん！　行こう！」
アヤメの手を取り、理人は走り出そうとした。が、
「あおわぁぁ！？」
マンホールについていた謎の突起に躓き、盛大に転んでしまう。そして、彼と手をつないでいたアヤメも。
「きゃっ！？」
共にずっこけた。
あと一人いれば三人組が完成するな……と、くだらないことを考えた理人は、自分が躓いたものを見て、ふと興味を覚えた。
「……？　なんだ、こりゃ？」
マンホールの蓋に溶接されたそれは、空の壺……のように見えるが、デザインが何となくエスニックで面白い。オリエントの匂いを感じるが……。
「くそっ、何してるんだ！　早く逃げないと死ぬぞ！」
「あ、ご、ごめん！」
とりあえず記憶の片隅にしまって、彼らは立ち上がり、今度こそ走り出した。

□

「あ、あんなの……一体、どうすれば……」
同じころ、中心街・郊外の荒原。五つの『絶望』は、中心街に集まりつつある。
一秒も無駄にはしていられない。早くしないと、奴らは合体して、倒すことはほぼ不可能になってしまう。しかし、それが分かっていても、恵奈の身体は動かなかった。
吉野には、『任せておけ』と言ってしまった。はじめの一体だけであれば、多少苦戦は強いられても、時間を稼ぐと言わず、倒すこともできたかもしれない。だが、現状ここに現れたのは五体。とても、恵奈一人では敵わない。数分を稼ぐ程度ならできるかもしれないが、その時間は、恵奈の命と引き換えのものになることだろう。

『奥の手』を、使わなければ。
（でも、あれは……あれは、使うわけにはいかない……）
確かに、あれを使えば、どうにかしてあいつらを倒すことはできるかもしれない。しかし、代償に、恵奈の命にも匹敵するものを失ってしまうことになる……かも、しれない。
確率としてはかなり低いのだ。小数点を割るだろう。だが、もしもその、０．００００００００００００００００００００００００００００１％が起こってしまったら？　そう考えたら、とても使うことなんてできない。
今すぐにでも、吉野を呼び戻してこようか。この世界など放り出して、脱出方法を模索しに行った彼の仲間のいる白い街へ、飛んで行ってしまった方がいいのではないのか。
正直なところ、アレを倒さなかったからと言って、誰が死ぬわけでもない。人類は火星に移住してしまったのだし。
むしろ、放っておいたほうがいいのではないか。人間は、この星に対してとてつもない不義理を働いてきた。自然を破壊し、空気を汚し、水を毒し……恵奈たち怪物も、その文明にちゃっかりと寄生してしまっているわけではあるが。
そんな、地球からしてみれば病原菌のような人間たちが、この豆腐のおかげで去っていってくれたわけだ。この星からしてみれば、これ以上の僥幸はない。もしかすると、あの怪物たちは、ある種の天の使いなのかもしれない。
再び、彼らをしっかりと観察してみる。頭も、腕も、脚も、全てがのっぺらぼうで抽象的なデザインは、最初に恵奈が感じたように、一種の神々しさも放っているように見える。
だめだ。やっぱりあきらめよう。そう思って、彼らに背を向けたときだった。
ふと、目に入ったものがあった。クマのぬいぐるみ……だろうか？文明のかけらも感じ取れないこの荒野に、ぽつりと落ちている不自然さ。土埃にまみれ、布はほつれ、目も当てられない状態だ。
なんとなく気になって、近くに寄って、手にとってみた。
「あなた、置いて行かれてしまったのね。かわいそうに」
呟いて、ふと気付く。
置いて行かれた――とは、限らないのではないか？　もしかすると、『失って』しまったのではないのか？
瞬間、脳裏に遠い記憶が甦る。
――わあ、くまさんだ！　かわいい！
――どう？　気に入ってもらえたかしら？
――パパとママからの誕生日プレゼントだぞー！　どうだ、うれしいか？
うれしいか？
――うん！　パパとママ、だぁーいすき！
――そうかそうか！　あはは、ぴあちゃんは本当にかわいいなあ！　この子、将来は君に似て美人になると思うぞ！
――ほんと？　すひあ、ママみたいにばいんばいんになれる？
――ああ、なれるともなれるとも！
――もう、からかわないでよ……うふふ。
「……はっ！」
確かあれは、夫と最後に迎えた、長女の誕生日のできごと。あの頃は、次女と三女も生まれたばかりで、大変な時期であると同時に、最高に幸せだった時期でもあった。
そうだ。このぬいぐるみの持ち主にも、きっとそんな幸せなときがあったのだ。温かい家族に包まれ、安らかに過ごしていたときが。
だが……それらは全て、目の前の怪物と、ウイルスに踏みにじられたのだ。吉野も言っていた。奴らは、多くの人を殺したと。こいつらは、人間をこの星から駆除・撃退すると同時に、彼らの幸せも全て破壊してしまったのだ。
「……許せない」
もう、空気がどうとか、森林がどうとか、そんな話はどうでもいい。人間中心主義と言われても構わない。恵奈は人間ではないのだが……同じく文明の恵みを享受する者として、彼女は怒りを抑えられなかった。
すべての生き物は、幸せになるために生まれてきているのだ。だが、こいつらは理不尽にもその法則に反し、多くの『幸福』を蹂躙した。その数は計り知れない。わたし個人の命などと、そして命と同等に大切なものとも、最初から比べることなどできやしなかったのだ。
「決めた……もう、迷わない。たとえ、全てが失われて、燃え尽きてしまったとしても構わない……わたしは、戦う！」
目を閉じて、恵奈は右手をまっすぐ、自分の前にかざす。
「焼べるは我が命、熾るは我が怒り、燃ゆるは我が魂……全てを灼き尽くし、断ち斬り、灰燼へと帰す煉獄の焔よ！　幾重にも揺蕩う服膺の一欠片を喰らい、今こそ、我が命に応えよ！」
恵奈の手のひらから、黒い火の粉が散った。それらは、だんだんと大きくなり、ついに『炎』と呼べるほどに大きくなった。

「魂魄転生……」

黒い焔はゆらぎ、細く長く伸びる。やがて両手の焔はつながり、右側・先端には、野蛮な焔の刃、左側には石突が形成される。

『黒燄煉劫儛』　第三形態　〝偃月刀〟」

そして完成したのは、黒い焔でできた、柄・刃含めて全長三メートルを誇る薙刀のような武器。だが比率としては、普通の薙刀よりも柄が短く、刃が大きい。中国に古くから伝わる刀・柳葉刀を、柄にそのままひっつけたようなデザインだ。

『黒燄煉劫儛』　第三形態　〝偃月刀〟。触れる者全てを灼き斬る、暴虐なる昏き焔の刃の、三番目に名を連ねる武器である。

『黒燄煉劫儛』は、指定した未来のイメージを心の中に投影する聖眼・『逆神の眼』と並ぶ、怪原恵奈のもう一つの異能力。この異能を説明するには、怪物などの異形と、それ以外の生物の違いから語らなくてはならない。

もともと、異形たちと普通の生物では、体のできる順序からして違う。普通の生物が、精子と卵子の受精によってできた卵に魂が乗り移るという形で生まれるのに対し、異形は生殖細胞と共に雄と雌の『魂の一部』を受精させ、それによって冥界、もしくは精霊界への門を生成して、転生する魂はそこを通って現世にやってくる。その後、門となった両親の魂の一部は転生する魂と一体化し、卵ないし母親の子宮内に宿った魂は合体した両親の魂に含まれていた肉体構成の方法を読み取り、内部に取り込んだ受精卵を使って、魂の内部に肉体を生成していく。簡単に言えば、普通の生物は肉体に魂が宿り、異形は魂に肉体が宿るという形になる。

そして肉体が完成した時、異形の体表には、魂のベールのようなものが薄く張られている状態となる。魂の内部で成長した肉体は、普通の生物の肉体のように、魂を完全に体内に閉じ込められないのだ。『内』と『外』の概念からして違うのだから。

余談だが、薄く張られた魂に遮られて、普通の生物からは異形が見えなくなる。彼らの目では、普通の光を反射しない性質を持つ全ての魂が反射している、恒星が放つ『霊光』を感知することはできないからである。世にいう『霊感がある』人間とは、この『霊光』を感知できる能力を持った人間のことである。

そして、恵奈の『黒燄煉劫儛』は、その薄く張った魂のベールを黒い炎に変え（この変化を恵奈は『転生』と呼んでいる）、それによって武器を生成する異能である。もとよりいかなる物理法則よりも優先される魂によってできた炎は、あらゆる物質を灰に変え、恵奈の意思以外のどんな方法でも消すことはできない。また、炎は彼女の魂の一部であるため、彼女を傷つけることはなく、本来の『火』と違って燃やすものを選択したり、燃える方向を操作したり、自在に温度を調節したりできるという利点もある。が、所詮『魂』とは霊体であるため、ばらばらにしたりすることはできないので、この炎が何かに燃え移ったりすることはない。ただ、熱し、斬るためだけの炎なのである。

だが、先ほども恵奈が危惧していたように、この異能を使うには、ただひとつの代償を支払わなくてはならない。それは、彼女の『記憶』である。魂の形態の変化というとてつもない行為には、それ相応にエネルギーを生成しなくてはならず、結果『魂』の一部である記憶が、ランダムにひとつだけ、対価として払われるのである。

その選択は、本当にランダムだ。「1＋1＝2」や、「聖徳太子」といったような、「知識としての記憶」から、「昨日プリンを食べた」というような「経験の記憶」まで、何が消えるか分からない。新しい、古いということも、そこには関係がない。

先にあげたような、いつでも取り戻せる、または取り戻さなくてもいいような記憶ならば、失っても構わないかもしれない。だがもしも、先ほど思い出していた「最後に夫と過ごした長女の誕生日」といった、かけがえのない「思い出」が失われてしまったら？

可能性は限りなく低い。三千年の歳月を積み重ねて来た恵奈の記憶の量からいえばなおさらだ。しかし……危険性が0とはいえない。それを案じて、恵奈はこれまでこの異能を封印してきたのだ。

だが、今回は勝手が違う。この怪物たちは、多くの、本当に多くの人のそんなかけがえのない「思い出」を、そしてそれが作られるはずだった場所を、時間を、ことごとく踏みにじってきたのだ。そんな奴らと戦うのに、恵奈ひとりだけが「思い出」の喪失を危惧するというのは、卑怯だと感じたのである。

「さあ、覚悟しなさい。全員、丸コゲの焼き豆腐にしてあげるから」

黒き翼、そして黒き焔の異形の戦巫女が、今、戦端を開く。

□

「魔導士とはな……また、ずいぶんとファンタジーなのが現れたものだ」

「ええ、先生……ただ、巨大な豆腐の怪物が歩いている前では、インパクトに欠ける気もしますが……」
「……ねえ、『まどうし』ってなあに？」
場所は再び白街南東部、町外れの荒野。とりあえず少女をどかした木埜たちは、地べたに座り込んだ彼女に、割と辛辣なコメントを浴びせかけた。
「いや、反応薄くない！？」
「だってなあ……この状況で魔導士なんかがいても、大して役に立つことなんてなさそうだし。こんな、俺たちと変わらない年頃の女の子が、あのデカブツに勝てるとも思えないし」
「ねえ、『まどうし』って何なの？」
困ったような顔で、皆はコノハを見つめた。
だが、ひとり考え込んでいた野花は、何かに気づいたらしく、唐突にぱっと明るくなった顔で、彼女に詰め寄った。
「あなた、本当に魔導士なのよね！　嘘じゃないわよね！」
「えっ？　あ、まあ、一応そういう形にはなってますけど……」
突然積極的に接してきた野花に、コノハは戸惑う。だがそんなことは気にも留めず、野花は情熱のままに、誰も想像しなかった問いを、彼女に問いかけた。
「じゃあ、特定の範囲内の……例えば、今私たちがあなたを囲んでいる領域内の、特定の一種類のウイルスを全て駆除するなんて魔法は、使える！？」
「え？　……え？」
コノハは状況をよく理解できず、『？』マークを顔に浮かべた。……が、それ以外の者たちは。
「……！　そうか！」
「なるほど……これで、さっき先生が言っていた問題は解決されるわけか……！」
「……あ、『まどうし』って、魔法使いのことだったんだ。……えええええええええええええええ！？」
ようやく話に追いつき固まった万尋はさておき、樹と広津は素直に納得する。確かに、もとの世界に戻る直前に、彼女の魔法で野花たちの周りだけでもウイルスを駆除できれば、木埜が先ほど言っていたように、自分たちの世界にウイルスを連れ帰らなくて済む。それどころか、ワクチンすらもいらなくなるだろう。
だが、当の木埜だけは、相も変わらず不敵な笑みを浮かべていた。
「いやいやいやいや！　私たちの知っている魔法使いというものは普通、特定の呪文なんかを覚えて、それに指定された魔法を使うものだろう？　そんな都合のいい魔法があるわけないだろう」
「あ……」
「……言われてみれば、確かにそうですね。『エクス〇リアームズ！』みたいな」
「……くっ」
野花は歯噛みした。木埜の言う事にも、一理はある。呪文も唱えない魔法使いなど、そうそう見たことはない。
しかし、コノハはその固定観念を、軽快に裏切った。
「いや、できるよ」
「な！？」
木埜の理論に納得しかかっていた樹たちそして木埜自身も、度肝を抜かれた。
「何だと！？　そんな呪文が存在するというのか？」
「そ、そんな都合のいいことが!?　いや、限りなくダサそうな気がしますけど……」
「あ、ありえねえ……」
言葉を失う三人。その前で、野花は得意げに笑う。
「ほら、見なさい。世の中、理にかなったことばかりじゃないってことよ」
世界とは残酷なものだと思っていたが……どうやら、思ったほどそういうわけでもないらしい。『渡る世間に鬼はなし』とまでは言わないが。
そんな彼らに、コノハは少し戸惑いながらも説明する。
「いや、別にそういう呪文が存在するわけじゃないよ？　そもそも、詠唱……みなさんの言う『呪文』を使うのなんて、本当に限られたときだけだし」
「何だって!?　じゃあ、『エクスペリア〇ムズ！』とか言わないのか!?」
広津はこの世の終わりを見たかのような表情を浮かべる。他の面々も、同じような雰囲気である。
「うん。その……『魔法』っていうのはそもそも、想念を形にしたものでね。呪文とかは元来(がんらい)必要なくて、重要なのは想像力なの。想像すること、そして使用者の強い意志さえあれば、だれでも魔法を使う事はできるんだよ」
「へえ……じゃあ、私でも魔法使いになれるの!?　私、空を飛んでみたい！」
「うん、定義上はね。ただ、ちょっとした『慣れ』みたいなものは必要だけど」
無邪気に問いかける万尋に、コノハは優しく笑顔を返した。
「で、その『一定の領域内のウイルス駆除』だけど。厳密にいうと、それ自体は私はできないんだよね……」

「え？　イメージすれば、できるんじゃないのか？」
　樹が首をかしげると、コノハは少し眉根を寄せて答えた。
「いや……私には、光線による射撃と、飛行以外の魔法は使えないの。だから、直接ウイルスを消すことなんてできない。やるとしたら、ウイルスを殺せる程度に威力を抑えた射撃を、ピンポイントで標的全てに命中させるしかないかなあ……」
「な……そ、そんなの無理ゲーじゃないか！」
「……まあ、理論上はね。でも、実は私の左眼、魔眼みたいなものになっていて。活動時間はあるけど、発動中は視界内のどんなものにでも射撃を命中させることができるの。専門的な言葉を使えば、『多重捕捉』っていうんだけど。だから、それを使えば問題ないかな」
「はあ……便利なのか不便なのか、よく分かりませんねえ」
「でも、これでウイルスの問題は解決ですよ。さあ、早く碑文の謎を解きに行きましょう。……コノハちゃん、だった？　これからちょっと移動するけど、いろいろと分からないことだらけだろうから、私が道中で説明してあげるわ」
「ほんと？　ありがとう！」
　野花を筆頭に、皆は町の方へと歩き出そうとした。
　しかし、この男は、まだ納得がいっていなかったようで。
「待て、コノハ君」
「？　何でしょうか」
　木埜は、既に退場モードだったコノハを呼び止める。それにつられて、残りの四人も立ち止まった。
「何ですか、木埜さん。既に結論は出たはずですが」
「いや、違うな野花君。今回も、君は重大なところを見逃しているぞ」
「……？」
　野花は、眉間にしわを寄せた。そろそろ、この男に対して本格的にフラストレーションを感じ始める頃である。
　だが、そんなことは気にせず、木埜は続けた。
「コノハ君。君の『多重捕捉』とやらは、体内のウイルスにも作用するものなのか？」
「「「「！」」」」
　それは、ここにいる彼以外の全員が見落としていた、しかしとても重要な問いだった。
「君は今、『視界内の』という言葉を使ったな。だが、体内の血管や臓器の中を、肉眼で『視界』に入れられる生物など存在しない。君の魔眼とやらは、それすらも可能にしてしまうものなのか？」
「……」
　全員が黙り込む。問いかけられたコノハですら、口をつぐむ始末である。
　コノハはひとときの顎に手を当て、「うーん」とひとつ唸ってから、答えた。
「それは、無理だと思います。私の魔眼の性能は、そこまで高くはありません。照準できるのはせいぜい、『見えている』もしくは『見えた』ものまでかな。『見えていない』ものを撃ち抜くことは、さすがにできないかと」
「そうか……これでひとつ、仕事が増えたな」
　木埜は神妙な面持ちになる。
　体内のウイルスを除去できなくては、木埜たちが死を免れることはできない。結果、そのための新たな手段を探さなくてはならなくなったのである。
「……ところで、さっきから何でそんなことを聞かれるんですか？　まさか、未知のウイルスがこの世界に蔓延しているとでも？」
　未だ状況を理解しないコノハは、遠慮がちに質問した。
「野花君、説明してやってくれ。君が一番、状況をよく把握しているはずだ」
「……分かりました。実はカクカク地デジ化……」
　再び、野花は現時点で分かっていることを、かいつまんで説明した。木埜と違い、コノハは質問を挟むことはなく、ただ真剣に野花の話を聞いていた。
「……というわけなのよ」
「なるほど……」
　コノハは納得したようにうなずく。
　そして、誰も口にしなかった言葉を、一切の恐怖なく、さらっと言い放った。
「じゃあ……あの化け物を、私が倒せばいいんだね？」
「うん……!?　えぇっ！？」
　あまりの違和感のなさに、皆は一瞬そのまま流してしまいそうになった。
「はっははははは！　君とは気が合いそうだな！」
「いや先生、笑ってなんかいられませんって！」
「あなた、本当にあれを見て言っているの!?　危険すぎるわ！」
「うん……いくらなんでも、それは無理だ！」
　高笑いする変人と、口々に反論する凡人たち。だが、コノハはそれすら、一切気にせずに言う。
「だって、あれを倒さないと、この世界の人たちが困るんでしょ？だったら、戦わない理由なんてないじゃない」
「いや、でも……」
「それに、あの都市の地下に『最終兵器』があるんでしょ。それもふたつも。

加えて、野花ちゃんのお仲間も、そっちに行ってる。その人を、放っておくわけにはいかないよ」
「……」
『純粋』。この少女は、ただひたすらに『純粋』だった。
「じゃあ、私行くね。私が戻るまでに、帰る準備を整えておいて」
「ま、待っ……」
樹が止めようとしたが、それが聞こえなかったのか、それとも聞こえていてあえて無視したのか、コノハは突如宙に浮き、そのまま巨大な怪物の方へと飛び去っていった。
「行っちゃった……」
万尋がぽつりとつぶやく。五人の思考は、彼女が小さくなって見えなくなるまで、停止していた。
「……さて。我々も、いつまでもこうして立ち止まってはいられないな」
おもむろに、木埜が切り出す。その目からは、愉悦の光はすでに消えていた。
「……はっ！　そうですね、先生！　あんな小さな女の子に、奇しくも僕たちは任せてしまいましたから」
「そう、だね……あの子も、がんばっている。私たちも、あの子のためにできる事をしないと」
広津と万尋は、強い意志を露わにする。それを見取って、木埜は『ぱん』と手を叩いた。
「よし、そうと決まれば役割分担だ。まず、しなければならないことを整理しよう。まず、遺跡と石碑の位置だが……野花君。その本に、全て記されているのかい？」
「え？　ああ……はい」
野花は、何か考え事をしていたらしく、うつむいており、少し反応が遅れる。だがそれも一瞬のことで、すぐに彼女は木埜の方に向き直った。
「残念だが、あの怪物に近寄るのは断念するとしよう。君の言う通り、謎解きを手伝ってやるよ。とりあえず、私と広津君は石碑の方に向かおう。いいね、広津君？」
「はい！」
「よし、いい返事だ。で、残りのメンバーだが……君たちには、ワクチンを探してもらおう。丁度、先ほどこの街を散策していた時に、病院を見つけてね。もしかすると、そこにワクチンがあるかもしれない。盗むという形にはなるが、仕方ないな。とりあえず、あるだけ持ってきてくれ。私たち以外にも、人が転送されてきている可能性は十分にあるからな。頼まれてくれるかい？」
「はいっ！」
「……仕方ありませんね」
「……はい」
万尋は元気に返事をしたが、残りの二人は対照的に、静かな返答だった。だが、木埜はそれについて特に言及しなかった。
「決まりだな。では、病院の場所を教えておこう。まず、そこの角を左に曲がってだな……」
本格的に、自分たちが進み始めた手ごたえを、木埜は感じた。

□

「セイヤあああああああああああああっ！！！！」
『じゅわっ』と小気味のいい音がして、焔の刃が『白』を切り裂く。
恵奈が最初に目をつけたのは、中心街で暴れ続ける『翼』だった。
最終的に彼らが集まるのは中心街である。そのため、全員集合してしまう前に倒さなければ、目も当てられないことになるのだが、遠くにいる『亀』や『ティラノサウルス』などと戦っている間に中途半端に合体されるよりは、ここで早くこいつを叩いてしまった方がいいと踏んだのである。
『ゴ　モ　オ　オ　オ　オ』
声帯のような器官があるのか知らないが、斬りつけられる度に『翼』はうめき声をあげる。
だが、戦闘が始まって数分しかたっていないにも関わらず、恵奈は一抹の疲れを感じ始めていた。
確かに、『翼』の動きは遅い。そのため動きが読みやすく、攻撃をかわすことは造作もない。加えて身体が大きいため、適当に〝偃月刀（ハルバード）〟を振り回しているだけでもこちらの斬撃は当たる。
だが、こいつは再生能力が尋常ではない。たった今斬りつけたところが、数十秒のうちに傷口がふさがり、元通りになってしまうのである。一度指も斬り落としたが、同じ時間で再生されてしまった。また、この巨体のため、恵奈が全力に近いパワーで斬撃を与えても、さしたるダメージにはなっていない。向こうからしてみればまさに、羽虫が人に立ち向かうようなものだ。
（……このままじゃ、キリがない）
薄々感じ始めていることである。戦況を変えなくては、いつか体力がなく

なり、弱ったところをはたき落とされてしまう。
恵奈は、『翼』から少し距離をとり、〝偃月刀（ハルバード）〟を構える。
「は　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」
すると、〝偃月刀（ハルバード）〟の炎の勢いが、だんだんと強まっていく。次第に勢いを増した炎は、ついに彼女の体躯をも超える大きさとなり、柳葉刀のような刃は、凶悪な龍の頭に、形を変えた。
「………『闇龍破翔（リンドブルム）』ッッ！！！」
恵奈が叫んだ瞬間、黒き魔龍は解き放たれ、咆哮と共に焔を撒き散らし、うねりながら、『翼』のもとへと飛んでゆく。
『ＧＵＹＡＯＷＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ』
『ゴ　モ　オ　オ　オ　オ　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
焔の龍は『翼』に食らいつき、瞬時に燃え広がり、その身体をだんだんと飲み込んでゆく。
これこそ、恵奈の武器全種類が一つずつ持っている固有の必殺技・〝龍撃（りゅうげき）〟である。著名な龍の名を冠した一つひとつの技は、それぞれが全て強力で、喰らえば並みの怪物は愚か、神でも無事では済まない代物だ。
恵奈の炎は、対象を燃やし尽くすまで何があろうと消えることはない。ひたすらに燃え広がり、相手を喰らうまで一歩も退かないこの龍の咢（あぎと）にかかった時点で、その敵の敗北は確定しているのである。
「お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お」
恵奈は渾身の力を、その両手に込める。火力はさらに強まり、ついに炎は『翼』の右半身を覆う。
希望の光が見え始めた。体力的にかなり厳しいものはあるが、これをあと四回放（はな）てば、豆腐の化け物どもは全て消える。勝利は決まったも同然だ。
しかし、炎が『翼』の胸の中心辺りに達した時、彼女のその安堵は、無残にも打ち砕かれてしまった。
「っ!?　何ですって！？」
『ゴ　モ　オ　オ　オ　オ』
突如、炎に支配されつつあった『翼』の右半身が、目に見えぬ包丁で『ストン』と切り落とされたように、まっすぐ崩れ落ちたのである。
「そ、そんな……」
恵奈が唖然としている間に、彼女の炎は地に落ちた残骸を覆い、髄まで食らい尽くしていく。だが、それは『翼』本体には何の影響もない。炎に侵蝕されていた部分は、全て捨てられてしまったのだから。
半身を失った『翼』は、バランスを崩してその場に倒れ込む。だが、すでに再生は始まっているらしく、切り口の体積が少しずつ増えているのが見て取れる。
恵奈の心に絶望がよぎった。『闇龍破翔（リンドブルム）』発動中に恵奈が〝偃月刀（ハルバード）〟に対して行える操作は、火力の増加のみである。したがって今のように、燃えている部分を切り離されてしまった場合、すぐさま本体に対象を変更することはできない。あくまでこの魔龍は、今燃やしているもののみを喰らい尽くすのである。
困った。これでは、いくら『闇龍破翔（リンドブルム）』を放とうとも、こやつらを滅することはできないではないか。
炎龍が豆腐の切れ端を食らいつくすのと、『翼』の再生が完了するのは、ほぼ同時だった。
『ゴ　モ　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
『翼』は雄叫びを上げる。あれだけ体の部分を失ったにも関わらず、一切弱った様子がない。
恵奈は途方に暮れる。だが、それはひとときのことだった。彼女の瞳には、ものの数秒で闘志の光が宿った。
「いいわ。物量で追いつかないなら、手数で押し切ればいい話だもの」
そう――神速を誇るわたしの『第二形態（ザ・セカンドフェイズ）』であれば、不可能な話ではない。特撮番組などでよくある「再生するなら、再生のスピードを越えて攻撃すればいいだけのこと」という理屈を実現できる。体力は消耗するが、今はそういうことを考えている場合ではない。倒せなければ元も子もないのだ。
恵奈が念じると、武器の形状に戻った〝偃月刀（ハルバード）〟が、変形を始める。柄（え）が中心で分かれ、持ち手は縮んで柄（つか）に、分かれた部分は刃に。
「形態変化（フェイズシフト）　『第二形態（ザ・セカンドフェイズ）』　〝双剣（クロスソード）〟」
現れたのは、黒い炎でできた、脇差（わきざし）ほどの長さの二本の西洋風の直剣。対になるようなデザインということはなく、どちらも互いに瓜二つの刃、瓜二つの柄（つか）、瓜二つの鍔（つば）を持っている。
双剣を手にした恵奈が飛翔する。『翼』はそれを、またも拳で迎撃する。
『ゴ　モ　オ　オ』
拳はその軌道を阻まれることはなかった。恵奈も、その場を動きはしなか

った。

が――その攻撃は、恵奈に到達しなかった。

「せ　い　や　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」

斬。斬。斬。目にもとまらぬ速さで疾(はし)る二本の刃(やいば)が、恵奈に当たる寸前で、『翼』の拳を削り取っていくのである。

『ゴ　ア　ア』

『翼』は急いで手を引っ込めようとするものの、巨躯ゆえの鈍重な動きが災いし、光の如き速さの恵奈の斬撃からは逃れられない。

『翼』がもたもたしている間に、恵奈は動きだし、『翼』の身体を拳から切り刻んでいく。二本の剣を、それぞれ『８』の字を描くように、絶え間なく閃かせ続ける。

するとどうだろう。その軌道に沿って、焔の剣の残滓(ざんし)が、だんだんと形を取り始めたではないか。

斬撃の度に、刃から散る火の粉。それらが集まって、何かを象(かたど)ろうとしているのだ。

「は　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」

すでに恵奈は、『翼』の身体の三分の一を削り取った。だが、彼女は止まらない。どれほどにその刃から火花を散らそうとも、この敵を完全に「灼き尽くす」までは、止まってなどいられないのだ。

そして、彼女が『翼』の首を刈り取った時――その刃の軌道に残った火花は、ついに明確な形をとった。

その、姿とは――〝８(むげんだい)〟。

「『永龍爛舞(ウロボロス)』ッッ！！！！」

自らの尾を飲み込んだ、無限を司(つかさど)る龍。それが、『翼』を侵蝕(しんしょく)する。

『ＧＡＲＵＵＵＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ(ガルゥウゥウァァァァァァァァァァァァ)』

飲み込んだ尻尾に口がふさがれ、出せないはずの雄叫びが、街に響き渡る。

なおも続く恵奈の斬撃に合わせて、永龍は舞う。うねるその身体は、『翼』の巨体をさらに燃やし尽くす。

『ゴ　モ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』

ついに身体の半分を喪った『翼』があげたのは、まさに断末魔の悲鳴。その巨躯はすでに地に倒れ伏し、最期の瞬間の訪れに抗おうと、腕を、そして翼をばたつかせる。だが、それでも恵奈を止めることは叶わない。

「は　あ　あ　あ　あ　あ」

恵奈が、両(りょう)の剣を大上段(だいじょうだん)に振りかぶった。それに呼応するように、龍も舞(まい)の激しさを増した。

力を、溜める。溜める。溜める。溜める。もう逃しはしない。再生もさせない。ここで、確実に仕留めてやる！

そして――ついに、解き放つ。

かに、思えた。

「セイヤあああ………⁉」

『翼』を消し去ろうとしていた斬撃は、途中で勢いを失い、あさっての方向に飛んで行った。それは『翼』から右側六十度ほどの位置にあった、五十メートル超えの高層ビルの中腹に直撃し、それを真っ二つに叩き折った。

なぜ、斬撃が逸れたのか。いや、それは思案する順序が違う。

なぜなら、恵奈はすでにその場にいなかったのだから。

「あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」

『翼』から遠く離れた、斬撃に叩き折られたのとは別の高層ビルの中腹。そこに一直線に突っ込んだ恵奈は、もがき、喘ぎ苦しんでいた。

何が起きたのか、全く分からなかった。最後の一撃を放とうとした瞬間、横殴りに、『何か』の奔流(ほんりゅう)が彼女の身体を吹き飛ばし、結果、斬撃は逸れ、そして彼女の身体は、いや彼女が今いるこのビルの階層全体が、それで覆われることとなったのだ。

赤黒い……というよりは少し茶色に近い、どろっとした高温の液体である。辛い匂いを放つそれは、恵奈を飲み込んでなおこのビルに流れ込み続け、ついにビルを文字通り横断し、彼女はそれに押し流されて、ビルの外へと吐き出された。

落下する、というよりは、『流される』と言った方が正しい。大量に流し込まれ続けるそれに、恵奈の身体は完全に覆われて、もはや息もできない。

「ドシャッ」という音がして、彼女は地面に叩きつけられた。が、それで止まることはなく、なおもしばらく液体に流された後、何か障害物に当たって弾き飛ばされ、幾度か地面をバウンドして、彼女の身体はやっと止まった。

「はぁ……はぁ……」

立ち上がる気力もなく、うつぶせに寝転がった彼女は、薄れゆく意識の中でしっかりと見た。あと少し、あと少しで倒せた『翼』が、みるみる再生していく光景。破壊され尽くされた街。そして、今なお続く、彼女を押し流したモノの奔流。

意識が途切れるまで、その液体は彼女を触覚、及び嗅覚から蹂躙し続けた。

それがついた自分の手を眺めて、彼女は最後に呟いた。
「ま……麻婆、豆腐……」
決して消えないはずの黒い焔の槍が、消えた。

□

「んんんんん……困った」
恵奈が麻婆豆腐の濁流に流される少し前の話。真っ暗な地下鉄のトンネル内を、懐中電灯片手に探索していた吉野は、ついに頭を抱えて座り込んだ。
アーネストから与えられた情報は、「地下」ということのみ。それが果たして地下鉄の構内なのか、はたまたどこかの建物の地下階層なのかは、一切聞かされていない。結局、この広い街全体を探し回るのと、何ら変わりがないのである。
降り注ぐ瓦礫や豆腐をどうにか躱して、勇ましく地下鉄の路線に駆け込んで行ったまではよかったが、かれこれ十分と少し、全く見つかる気配がない。この数字だけを見ると、少し早いように感じるかもしれないが、多少探したうえでこの事実に気付くと、これから途方もない苦労が待ち受けている事に、より一層愕然とするものだ。
いや、そもそも、その最終兵器とやらがどんな姿かたちをしているのかすらも聞かされていない。大きいものなのか小さいものなのか、機械なのか武器なのか、生物なのか無生物なのか。そんな基本的な情報さえも把握できていないのだ。
（……どれくらい、歩いたんだろうな）
地下への入り口は、街の中心部から少し南西に外れたところにあった。歩いて十分ほど経ったから、ちょうど今、中心あたりか？　いずれにしても先は長そうだ。
「よしっ」
気を取り直して立ち上がる。入念に懐中電灯で、もう一度辺りの壁を照らす。さしたる異常は見られない。
この地下鉄は、路線図を見た限り、どうも街と街とをつなぐ事を主には考えていないようだ。基本的には街の中を移動するため……路面電車的な役割の方が強いらしく、駅と駅との間がさほど離れていない。もう少し歩けば、次の駅に到着するはずだ。
（恵奈さんも、いつまでもつか分からないしな……あの人を信頼しないわけじゃないけど、やっぱり一人であのデカブツに挑むのは無茶だ。早く見つけないと！）
そう思って再び歩き出した時。ふいに、二つの音が聞こえはじめた。
ひとつは、急ぐような人の足音。それが二人分。かなり激走しているらしく、テンポが速い。タイタツで言うと難易度『むずかしい』くらいか。
もうひとつは、大量の何かが堰を切られて流れてくるような、「ゴゴゴゴゴ」という音である。山崩れでも起きたか、と錯覚する程度には、それは大きい。
二つの音は、だんだんとこちらに近づいてきている。しばらく呆けていた吉野は、はっ、と我に帰る。
「……まずい。まずいまずいまずいまずい！」
本能的にくるりと回れ右をして、吉野は全速力で今来た道を駆け戻り始める。何が起きているかはわからない。だが、この場を離れなければ、二度と元の世界の太陽は拝めないだろうという事だけは、嫌というほどに実感した。
「ＡＡＡＡＡＡＡＡｒａｒａｒａｒａｉｉｉｉｉｉ！！！！！！！！！」
叫びながら走る。走る。死に物狂いで走る。ただし某征服王とは違い逃走だが。戦車もないし。
もう少し。もう少しで入ってきた駅にたどり着く。そうすれば地上に出られるはず。兵器は見つからなかったが、とりあえず命だけは助か
「がほぉ！？」
という吉野の甘い期待は、腹部への固い衝撃によって阻まれた。
線路内の非常口のドア。その取っ手が壁から突き出していたことに、懐中電灯をリレーのバトンのように持って走っていて、道を照らせていなかった吉野は気付けなかったのだ。
もんどりうって大げさに倒れる吉野。後方の轟音と足音はその間にも距離を詰める。
「かはぁ……は、腹が……」
腹を押さえてうつぶせに転がったその時、吉野は初めて後方を見た。
足音の正体は、若い少年と少女。どちらも中学生くらいに見える。少年の方がＬＥＤタンブラーを片手に道を照らし、少女は彼に手を引かれている形だ。
そして、轟音を引き起こしているのは、赤黒い（茶色か？）の、ねっとりとした液体。どう表現するのが的確かと言うと……〝麻婆豆腐〟だろうか？白いものが混じっていることから、そう思っただけだ。
少年と少女は、迫りくる麻婆豆腐に追いつかれかけている。特に少女の方

が辛そうで、肩で息をしながら、どうにか走っているという様子だ。すぐにでも離脱しなければ、彼らは麻婆豆腐に呑みこまれてしまうだろう。
どうにか救う方法はないのか……と、ここまでの思考をわずかコンマ数秒のうちに終えて、吉野は気付いた。
「君たちッ！　止まるなッ！　そのままここに突っ込むんだあ――ッ！」
そう叫んで、吉野が開いたのは――数秒前に彼を阻んだ、非常口のドア。
「急げえぇ――ッ！　麻婆はすぐ後ろに近付いているぞぉ――っ！」
「……！　は、はいっ！」
先に入った吉野と視線を交わし、少年は走りながらも答える。そして――
「おおおおおおっ！！！！」
どうにか彼らが飛び込んだ瞬間に、吉野は非常口の扉を閉めた。直後、大質量の液体が通り過ぎていく音がしたが、ドアは思いのほか頑丈に作られていたらしく、壊れることはなかった。
「はあ、はあ……危なかったな、少年……」
「は……はい……もう、ダメかと、思いました……」
「……」
九死に一生を得た、とはまさにこのこと。吉野も、少年も、少女も、はやる胸の鼓動が治まらずにいた。
「はあ……す、少し、休もうか……」
「はい……そう、です、ね……」
少年は苦しそうに答える。見たところ、肌の色も白いし、運動には慣れていないのだろう。
少し呼吸が落ち着いたところで、改めて三人（正確には二対一、だが）は向かい合った。
「さて……まずは、自己紹介といこうか。
俺は吉野朔。大学生だ。どういうわけか、別の世界からこの世界に転送されてきてしまって、今で二時間といったところか。基本的には、面白い事が好きだ。よろしく頼むぜ」
「よ、吉野さん、ですか……よろしく、お願いします」
礼儀正しく少年は正座して、お辞儀をした。だが少女の方は、まだ吉野に心を許していないらしく、少年の陰に隠れるようにして、吉野を睨みつけている。
そうしたことは心得ているのか、顔を上げた少年は、自分だけでなく少女の分も自己紹介をしてくれた。
「俺は里谷理人です。こんな見た目ですけど、一応高校一年生です。こっちは、同級生の倉持アヤメちゃん。俺たちも、ちょうど二時間くらい前に、この世界に送りこまれてしまったみたいなんです」
「ふむ……やはりそうだったか……」
吉野はアゴに手を当てて、首肯した。
「一応、ここに来るまでの経緯というものを話してもらえないか？」
「あ……はい。大したことはしてないですけど」
時折噛みながらも、理人はこれまでのできごとをざっと説明した。そして、自分を救った女性・怪原恵奈の話になったところで、唐突に吉野が食いついた。
「何！？　君、恵奈さんに会ったのか！？」
「えっ？　あ、まあ、はい……もしかして、お知り合いですか？」
理人は目を見張る。縁とは不思議なものだ、と、彼らはしみじみと実感した。
「いや、実は俺も十分と少し前に会っただけなんだが……不思議と、気の合う人だった。……いや、人間じゃないが」
「……え？　どういう意味ですか」
首をかしげる理人を前にして、吉野は「しまった」と思った。おそらく、彼は彼女の本来の姿を見ない、いや見る事ができないうちに、彼女と別れてしまったのだろう。普通の人間に彼女のような存在を感知する事ができないのは言うまでもないこと。異質な存在に普段から触れ合ってきた吉野には、その前提が欠如していた。
なんとか取り繕おうと、苦し紛れに吉野は首を振った。
「あ、違う違う！　あの、天文学的なスタイルのことだよ！　あれはもはや人間じゃない！　って話さ」
「ああー！　確かにそうですね！　あんなスーパーダイナマイトボディ見たことがな痛てててて！」
頭の上で電球が「ピコーン」と光ったように納得した理人のほっぺたを、少女が容赦なくつねりあげた。
「やめろ、変態。あんなムッチムチＢＢＡのどこがいいんだ」
「アヤメちゃん……それ本人の前で言ったら殺されるよ……」
この悪態には、さすがの理人も呆れる。普段から毒舌のアヤメだが、度が過ぎると本当に身を滅ぼすと思う。
だが、吉野はそれを笑い飛ばした。
「はっははは！　天下のエキドナ様にそんな暴言を吐くとは、お嬢ちゃんもなかなか見どころあるじゃないか！」

「え……」
「は……？」
「……あ」
　致命的なミスを交えて、だが。
「い、いや、だから違うってば！　その、ニックネーム！　ニックネームだよ！　彼女と話した時に、『恵奈って名前、なんかエキドナっぽいですね～』『あら、そう？　じゃあそう呼んでくれていいわよ』っていうノリになってさ！　あはは……は」
　冷や汗が額に浮かぶ。が、幸運にも理人は納得してくれたようで。
「なぁるほど！　そうだったんですか！　確かに恵奈さんってエキドナっぽいですよね……あはは……」
　表面的にも作り笑いをしているのが見て取れる。しかし……その彼の努力は、アヤメによって完全に無に帰された。
「茶番はもうやめろ。間違いない、アレは人間じゃあない代物だってことは、戦ったときから分かっていた」
「……何だって！？　君は、恵奈さんと戦ったのか!?」
　吉野の問いに、アヤメは身震いをしながら答える。
「ああ……恐ろしい女、まさに『怪物』だ。よもや、私の『言霊（ことだま）』が効かない生き物がいるとは思わなかった」
「こ、『言霊』？」
　こちらも自爆するアヤメ。気付いた時にはすでに遅し、「い、いや、違う！」と反論しても、吉野は疑念のまなざしを緩めない。
「はあ……仕方ない、アヤメちゃん。この人は信頼できそうだし、話しておいてもいいんじゃないかな」
「……すまない」
　観念した理人が引き継ぎ、説明を続ける。
「アヤメちゃんには、超能力があるんです。由来は言えませんが、『人を言葉で思いのままに操れる』能力なんですよ」
「ほお……そりゃ、すごいな」
　吉野は素直に感心する。これまで伝説上の生き物だの神だのとは何度も出会ってきたが、超能力者とはついぞ縁がなかった。しかも能力がチート級に強い。
「ええ。彼女は、恵奈さんが俺に何かよからぬ事をしようとしていると勘違いして、その力で攻撃したんですが……最初は効いたらしいんですけど、途中から何を言っても『命令』に従わなくなっちゃったらしくて。そんなかつてない状況に出くわしたアヤメちゃんは、パニクって負けてしまったというわけです」
「ち、違う！　他にも理由はいろいろあるんだからな！」
　アヤメは怒って反論する。が、どう言っても負け惜しみにしか聞こえないのが悲しい。
　とどめを刺すように、理人はその反論をスルーして、話を続けた。
「それで、その戦闘の跡を実際に俺も見たんですけど……やはり、人の所業とは思えませんでした。地面に大きな溝が刻まれていて……。
　それに、まだ不思議なことがあるんです。さっきも説明したように、俺、熱中症で倒れてたんですけど……俺が起きたのを見た恵奈さんが、急に自分の手を手刀で傷つけて、その血を俺に飲ませたんです。そしたら、身体のだるさが嘘のように引いていて。しかも、まばたきもしないうちに、彼女の手の傷は跡形もなくなっていたんです。彼女が人間でない……そう、エキドナだというのなら、それらの現象は全て説明がつきます」
「……はあ」
　吉野は溜め息をつくしかなかった。この少年、子供っぽく見えて実は頭がよく回る。
「ああ、そうだとも。彼女は人間じゃないさ。そしてその力で今も、地上であの化け物の相手をしてくれているんだ。俺たちが最終兵器を探すための、時間稼ぎにな」
「「……！？」」
　アヤメと理人の顔つきが変わる。
「嘘、だろ……？　あんな、デカいのと……？」
「そんな……恵奈さん……」
「そうだ。だから俺たちは、彼女のために一刻も早く、目的を達成しなくっちゃあならない。
　説明が遅れたな。俺は今、この街で、あの怪物どもに対抗するための兵器を探している。それは、この地下のどこかにあるらしいんだ。一口に地下と言ってもあまりに広いが……ひたすらに探す以外、俺たちに道はない。
　でも、さっきの麻婆豆腐で、この辺の線路は埋まっちゃったよなあ……また、どこか入口を見つけないと……」
　吉野は再び頭を抱えた。
　その時である。説明を聞いて、しばらく考え込んでいた理人が、はっと顔を上げた。
「あ！　そういえば俺、気になるものを見ましたよ！」
「何!?」

吉野は途端に喰らいつく。
「変な形の、空の壺みたいなのが、ここに来る途中のマンホールのふたに溶接されてたんです。俺、それにつまずいて転んじゃって……でも、普通そんなのつけないですよね！　ほら、下水道も地下ですし！」
「それに違いない！　早速行くぞ！　で、それはどこにあるんだ？」
目を爛々と輝かせて尋ねる吉野。しかし、理人は途端に言葉を濁した。
「いや、その……マンホールのふた、ですから……地上、です……」
瞬間、吉野とアヤメの顔が青ざめた。

□

「はあ……。ここもない、か……」
木埜の指示で病院へと送られた野花、万尋、樹の三人は、古ぼけた病院でワクチンの捜索を続けていた。全部で六階建ての比較的大きな病院で、一、二階は万尋、三、四階は野花、そして五、六階は樹がそれぞれ捜索することとなった。
そして野花は、今やっと三階の捜索が終わろうとしているところだが……それらしきものは全く見当たらない。使えそうなのはせいぜいＡＥＤくらいのものだ。
電気が通っていないこの病院での探索はなかなかに困難だ。明りがつけられないから、どの部屋も薄暗くて探しづらいったらありゃしない。というか気味が悪い。呪いというオカルトチックなものに頼ろうとした自分ではあるが、正直に言ってあの類のものはあまり得意ではないのだ。できることなら誰でもいい、一緒に探したかった。万尋がいればあの快活さに化け物どもはすごすご退散していくだろうし、樹は……まあ、いないよりましだろう。身代り程度にはなる。
そう考えて、野花は再び自己嫌悪を抱く。
自分とは、なんと小さい人間なのだろう。本当に自分のことしか考えていない。だから虐められたのかもしれない、と今なら思える。
この感情は、先ほどの『じゃあ……あの化け物を、私が倒せばいいんだね？』というコノハの言葉を聞いた時から、唐突に湧き上がり始めたものだ。自分はなぜ、彼女や木埜のような勇気が持てないのか。なぜいつもおびえて縮こまってしまうのか。そんな自分が、急に嫌になった。
そうだ、まさしくそういうことじゃないか。いつも怖がっているから、格好の的にされるんだ。そのくせ恨みだけは強くって、あいつらに正々堂々立ち向かうことをせずに、呪い殺すなんて卑怯な手段をとろうとしたんだ。私はなんて臆病なんだろう。ほら、今も震えている。心細くって、怖くて震えている。そして助けを求めているんだ。自分からは何をする勇気もないくせに、ただ一方的に、助けてもらおうと願っているんだ。何と自分勝手なことか。何と自己中心的なことか。私なんてクズだ。消えてしまえばいいんだ。そう、ここで豆腐になって、無様に崩れ落ちて死んでいくのが、私にはふさわしいんだ。他の人たちは世界を救うために呼ばれたのかもしれないが、私は違う。私みたいな自己中女は、ここで死ぬのがお似合いだと、神様が裁きを下されたのだ。お前はもう救いようがないと。社会のゴミは淘汰されろと。そして、私は一人で死ぬのだ。私が最も嫌いな孤独の中で死ぬのだ。このおあつらえ向きの墓場で。誰も私のことなんて知らない、亡骸すらも誰にも見つけられないこの世界で。それこそ私にお似合いの最期なのだ。……なぜだ。なぜ、目の前が曇るんだ。この目から流れ出るものは何だ。私はただ、事実を心の中で確認しただけじゃないか。悲しいなんて思っちゃいけないんだ。泣く資格なんて私にはないんだ。止まれ、止まれ、止まれ
「おい、どうした」
「ひゃうぅ！？」
後ろからかけられた声で、野花は我に帰る。振り返ると、そこには樹がいた。
「な、何してるのよ、こんなところで。もうワクチンが見つかったのかしら」
「いいや、全然。上二つの階は全部病棟だったから、探さなくてもいいかなと思って降りてきたんだ」
「……呆れたわ、なんて無能なの。可能性があるところは全部探しなさいよ！」
「あ、ああ……そりゃ、悪かった……」
申し訳なさそうに、樹は頭を掻く。
「ほら、分かったら早く行きなさい！　私だって忙しいんだから！」
野花はそっぽを向いて樹を追い返す。
本当のところを言うと、彼には残ってほしい。「大丈夫だよ」と励ましてもらいたい。安心させてもらいたい。
でも、そう思う事は私には許されないことだ。私は最期の瞬間まで孤独のままに生き、そして孤独のままに死ななくてはならない。それが臆病者への、そして怠惰な私への裁きなのだ。
そうけじめをつけて、樹の方を向かないでいると、にわかに彼の足音が止

まった。
「何？　まだ言いたい事でもあるというの。時間の無駄よ、さっさと行って」
冷たく突き放す。そう、これでいい。これでいい……。
が、樹はその態度を無視した。
「……あのさ」
「くどいわ！　早く行ってって言ってるでしょう！」
再び突き放す。だが、彼の足は動かない。
「その……『大丈夫だよ』」
「！！」
だめ。そんなこと言わないで。私がそんな言葉をかけられることは許されていない。私に『安心』なんて許されていない。なのに。なのに。
「強がってるふうに見えるけど……この世界に来て、『不安』なんだよな？　右も左も分からなくって、なのに数時間後に死ぬとか急に言われて、世界を救えとか頼まれて。もうわけわかんねえよな」
「違う！　私は強がってなんかない！」
なぜ、そんな優しい声で私に話しかけるの。そんなの私にはもったいないの。幸せなんか、欲したらダメなのに。
「気にするな。誰だってそうだと思うぜ？　俺や広津さんはもちろん、元気そうな万尋ちゃんだって、飄々とした木埜さんだってそうだろう。まあ、コノハちゃんみたいのもいるにはいるが……あんなふうに振る舞える人なんて特殊なんだよ。だから気にしなくていいんだ。怖いのは当然さ。だからこそ、みんなで乗り越えていくんだろう？　俺たちゃほんの数時間の付き合いだけど、同じく『英雄』として選ばれた仲間なんだ。励ましあって、支えあって、絶対に元の世界に帰ろうぜ」
「……」
私は……私は……
「じゃあ、今度はちゃんと探してくるよ。お互い、がんばろうな」
それだけ言い残して、樹は来た道を引き返して行った。
「……何よ、あいつ……ぐすっ……」
それ以上、心の中でも言葉を紡ぐことはできなかった。野花はしばらくその場にうずくまって、泣き続けていた。

□

白街北西部の遺跡群、その中でもひときわ大きな、塔のような建物。その中で木埜と広津は、ずっと頭を悩ませている。
「……はーっはっはっはっはっはっは！　はーっはっはっはっはっは！　はっはははははは！」
「どうしました先生……何かヒントでも掴めましたか……」
「いいや、皆目見当もつかん！　何だこの詩は！　意味不明にもほどがある！　分からなさ過ぎて笑える！」
「『さっぱり分からない』とでも？　どこの変人物理学者ですか……」
広津のスマートフォンで撮影してきた写真、そして古代の祭壇を前にして、先ほどから二人はずっと頭をひねっているが、全くもって答えが見えてこないのだ。
詩の内容は、『条理を越える英雄等　数多の扉のその先に　光求むるならば　彼の地滅ぼす天魔の　冷たく、白き、その心　舞い踊る海の拍子木と蒼く細い大地の恵み　そして、一滴の琥珀色の涙を』である。『条理を越える英雄等』が自分たち、つまり異世界からの来訪者であること、『数多の扉』が世界と世界をつなぐ通路であること、『光求むるならば』が脱出を求めることであるという程度は分かったが、その先の語句の意味が一切見えてこない。
そもそも、木埜たちの本領はこういう謎解きではない。私立探偵とその助手を職業にしているだけあって、合理的なデータ、現状から過去に起きた事を導きだしたり、論理的な謎を解いたりするのは得意なのだが、こういったある種のファンタジー的なことにはとんと疎いのである。
それでも本来の優秀であるはずの知恵を絞って考えてみたがこのザマだ。土俵が違うというのは、こんなにもやりにくいことなのか。
「ふむ……このまま考えていても、らちが明かんな。どれ、さっき拾ったアレでも食べないか」
「ええー……アレですか……」
広津は眉間にしわを寄せると、気が進まなそうに、持っていたビニール袋からそれらを取り出した。
ビニールのパックに入ったカツオの削り節が一袋。葉ネギが一本。うすくち醤油が一本。
これらは、木埜たちが白街に入る直前に訪れた洞穴に、広津が今持っているビニール袋に入って置いてあったものである。いつ、誰が、何のためにこ

んなものをそんなところに置いて行ったのかは知る由もない。
「いつのものかも分かりませんし……拾ったものですし……第一、ネギと鰹節と醤油だけですよ。どうやって食べろと」
「何もないよりマシだろう。腹が減っては戦はできぬ、というのは古来より伝わってきた常識だ」
「僕は食べませんよ。豆腐になる前に、食中毒で死んでも知りませんからね……」
「それは問題ない。確実に私たちが豆腐になる方が先だからな、ふはははは」
木埜は迷いなくネギを手のひらサイズにちぎり、鰹節のパックを開けようと袋に力を込める。
「む……こやつ、なかなか手ごわいな……。この、こら」
「ああもう、そんなにしたら中身が飛び散りますよ？　ちゃんと切り口があるでしょ、ほら、そこに」
「君は黙っていたまえ！　私は、この、開け方に、こだわりが、あぁあある！……あ」
「あー……言わんこっちゃない……」
木埜が無理に力をかけた袋は、案の定破裂し、勢いよくその内部をぶちまけることになった。
「見たまえ広津君……鰹節の雪が降っているぞ……」
「あーあ、もったいない。まあ、賞味期限が怪しそうでしたから、これでよかったんじゃないですか」
興味なさげに広津はつぶやく。散らばった鰹節を片づけてやろうという気は微塵もないらしく、その場にあぐらをかいて座ったままだ。
「やれやれ、かわいそうに……ん？」
仕方なく、とりあえず一か所に固めておこうと思い立った木埜の目に、奇妙な光景が映った。
「お、おい広津君！　これを見たまえ！」
「ったく、今度は何ですか……えっ」
最初は無気力だった広津も、この光景には言葉を失った。
祭壇の上に落ちた鰹節が、光っている。およそ現実とは思えぬ状況に、木埜たちは思わず目を奪われた。
「これは……どういうことだ……」
「さ、さあ……」
彼らが呆けた顔で不思議な現象を見つめている間にも、鰹節は光を増していく。それと共に、お好み焼きの上に乗せられたときのように、鰹節たちはゆらゆらと揺れ始めた。
さながら、踊っているかのように。
「――！　そうか、分かったぞ！　謎は解けた！」
「……えっ!?　ど、どういうことですか!?」
戸惑いの色を隠せぬ広津に、木埜は興奮して説明する。
「『舞い踊る海の拍子木』だ！　削り節にされる前の鰹節は、それどうしをぶつかり合わせると、『コン、コン』と良い音がするだろう？　この詩は、あれを拍子木に見立てていたんだ！」
「なるほど！　そういうことでしたか！」
広津は『ガッテン』とでも言うように右のこぶしで左の手のひらを叩く。
「また一歩、脱出に近づきましたね！」
「ああ……これで残るはあと四つ。『彼の地滅ぼす天魔』『冷たく、白き、その心』『蒼く細い大地の恵み』『そして、一滴の琥珀色の涙』だ……ん。ちょっと待てよ」
ほっ、とため息をついた木埜は、再び考え込んだ。
「どうしたんですか、先生。もしかして、また何か見つけたんですか」
「いや……もしかすると、このビニール袋に入っているもの全て、私たちが外に出るための鍵なんじゃないか」
「な!?」
衝撃的な木埜の発言に、広津は再び度肝を抜かれた。
説明するより見た方が早い、と、木埜はネギと醤油を祭壇にぶちまける。すると、
「お……おお……」
同じように、ネギと醤油は光り始めた。
「やはりな。おそらく、『蒼く細い大地の恵み』がネギで、『一滴の琥珀色の涙』が醤油だ。例の科学者が私たちのために置いて行ってくれたのだろうな。そのまま祭壇に置いておいてくれれば助かったんだがな……。残るは、『天魔』の『冷たく白きその心』だが……これも、どこかに隠されているんじゃないか」
「へえ……やっぱり先生はすごいですねえ……」
広津は素直に感心した。いつも思うが、この人の思考力についてはまるで理解できない。一体どんな人生を送ってきたらこんな脳が完成するのだろうか。
だが、そんな地味な反応をした広津に、木埜はツッコミを入れた。

「おい、ちゃんと話を聞いていたか？　最後の一つは、どこかに隠されているんだぞ？　つまり私たちは、今から最後の一つの鍵を見つけに行かなくてはならないんだ。どこにあるか一切ヒントのないものを、この世界で探さなくてはならないんだ。近くにあるのか、遠くにあるのかも分からない。これは絶望的だ」
「あ……まあ、そうですね……」
「……まあ、それでも探すしかないわけだがね。私たちは『この世界からの脱出』を任されたチームだ。やれるだけのことはやろう」
光る鰹節、ネギ、そして醤油が乗った祭壇に背を向けて、木埜は遺跡を出る。慌てて、広津も彼の後を追った。

□

「〝広域拡散射撃（クラスターショット）〟！！！！」
次々に放たれる桃色の光が、『高野豆腐』の体を貫いた。
コノハが野花たちと別れ、戦闘を開始してから十数分が過ぎた。途中、数キロ先にいた『ティラノサウルス』の口から一直線に放たれた麻婆豆腐の奔流が、行く先の中心街に突入するという肝を冷やす事件はあったが、少し離れていたためにどうにか具にならずに済んだ。
そして、今の今までこの『高野豆腐』と戦ってきたわけだが、消耗戦の感が否めない。どれだけ撃っても再生するこの巨人といつまでも戦っていては、こちらの魔力が先に尽きてしまう。
が……これといって決定打もないのが現状である。今ので胸辺りを吹き飛ばすことには成功したが、すぐに再生される。
（……あ、そうだ。範囲攻撃でダメなら……収束させれば！）
天から舞い降りてきたアイデアを、コノハはすぐさま実行に移す。
掲げた両手に、桃色の光が集まる。その光球はどんどん巨大になり、テニスボール大から、ソフトボール大に、サッカーボール、バスケットボール、そしてついにはバランスボールほどの大きさになったとき。
「――――〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟ッッッ！！！！」
光球は光の瀑流となって、『高野豆腐』に向かって放たれる。巨大すぎる怪物には避ける間もなく、光はその腹部をきれいに貫通した。
今度こそやったか……と思ったが、どてっ腹に大穴を開けられたにも関わらず、どういうシステムなのか、皮一枚でつながって、そのまま街に向かって歩き出した。
今のところ、こいつはコノハに対する攻撃行動はとっていない。ただ、中心街に向かって進んでいるだけだ。が……こいつが中心街に到達するということは、それすなわちこの世界の滅亡を意味する。あの五体が合体してしまったら、もう私の手には負えない。
魔力切れ覚悟で、〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟を連発してしまえば、この一匹くらいは倒せるだろうか。が、それはそれで危ない。残りの四匹を中心街に行った野花の仲間たちが探す最終兵器に委ねるというのは、いくらなんでも彼らの荷が重すぎる。何より、コノハ自身が生きて帰れる保証がない。訪れて数分のこの世界に命を懸ける程の義理は、そして慈悲は彼女にはない。
詰んでしまっている感がある。が、彼女は諦めることはしない。命を懸ける程の義理はないと言ったが、やれるところまではやってみよう。
再び、桃色の光を手元に集中させる。再生はまだ済んでいない。今叩けば、倒せる可能性も無きにしもあらず。
しっかりと照準を定める。手元の光球が巨大化していく。
「〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟ッッッ！！！！」
再び、もはや砲撃と呼べそうな射撃を、『高野豆腐』に向かって放とうとした、その時。
後方から噴き上がった白い液体が、滞空するコノハを襲った。
「!?」
どうにか液体をかわす。射撃は不発に終わり、光の玉は霧散する。
振り返ると、その白い液体は、かなり後方にいた『クジラ』の怪物から放たれていた。
「何、これ……豆乳、みたいな……」
手に少しかかったしぶきの匂いを嗅ぐと、特有の癖の強い香りがする。麻婆豆腐に続いて豆乳で攻撃とは、どこまで豆腐を推してくるのか。
しかし、困った。これでは『高野豆腐』への攻撃に専念できない。奴は私に対して攻撃行動をとることのないありがたい敵だが、その悪く言えばカモ的な存在が目の前にいるにもかかわらず、後ろから射撃をされては、安心してバカスカ射撃などできないではないか。
「……よし」
とりあえず、『クジラ』は後回しだ。後ろからの豆乳には注意しておいて、今は『高野豆腐』に集中しよう。
そう思って、再び『高野豆腐』に向かって飛び始めた時である。ふいに、『高野豆腐』は歩みを止めた。

コノハは少し不思議に思ったが、これほどの好機はない、と、ここぞとばかりに距離を詰める。三度（みたび）、〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟の準備だ。
が……ここで『高野豆腐』は、思いもよらない動きを見せた。
再生しかかっている体を大きく屈める。何となく嫌な予感がしたときには、すでに遅かった
『ゴ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　！　！　！』
突如、縮こまったバネが一気に伸びあがるように、『高野豆腐』は体を反らし、雄叫びをあげた。その衝撃波はすさまじく、音の領域をもはや逸脱したものだった。窓ガラスは吹き飛ぶ。土煙がもうもうと上がる。飛行していたコノハはバランスを崩し、後方に飛ばされる。
『高野豆腐』を中心に、全てが後退したように感じる瞬間だった。それは誇張して言えば、ホワイトホール（実際にそんなものの存在は確認されていないが）が地上に出現したとも表現できただろう。全てが吐き出される。押し戻される。そんな状況だった。
コノハはかなりの距離を飛ばされたが、どうにか高速道路の電灯につかまり、落下死の憂き目は逃れた。そうして飛行魔法を多少かけながらも空中に浮遊していて、数十秒の後、やっと『高野豆腐』は咆哮を止めた。
威嚇行動か何かだったのだろうか。攻撃というには、少々威力に欠けるものがある。……まあ、普通の人間ならば即死してもおかしくはないが。
そう案じられたのは、つかの間のことだった。
「……!? な、何……！」
『ゴ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
再び『高野豆腐』が咆哮する。しかし、その衝撃は、今度は先ほどと逆向きに訪れた。
先ほど押し戻されたモノたちが、今度は『高野豆腐』の方に引き寄せられ始めたのである。ガラスの破片も、土煙も、全て風向きを変えて、その中心に向かって吸い寄せられていく。
そして、当然コノハも。
「……何……何なのぉ――っ！！！！」
先ほどとは逆の方向に、電灯を掴んで踏ん張る。もちろん飛行魔法による抵抗も忘れない。
そして、そこで彼女は、恐るべき光景を目にした。
「えっ……ど、どうして」
ドン、と、先ほどまで存在していなかった、巨大な白い物体が、コノハの視界を覆っていた。

全高はかの世界一の高さを誇る電波塔すらゆうに上回るだろう。こいつの前では、あの『高野豆腐』すらも霞んで見える。凶悪な牙と顔つき。筋骨隆々の体つき。それに反して小さな日本の前足。
ティラノサウルス・レックス……俗にいう『ティラノサウルス』だ。それを、何百倍にも大きくした生き物。立っているのが不思議なその巨体は、つい先ほどまで遠く数キロ先の彼方にあったはず。それが、どうしてこんなところにいる？
よく見ると、『ティラノサウルス』は、自分の力で歩いていない。地面がオートウォークであるかのように、スムーズにスライドしているのだ。たくましい二本の脚で立ったまま、ベルトコンベアーに乗せられて運ばれるように。
呆気にとられたまま、コノハはその様子を眺めている。ゆっくりと通り過ぎていくのを何もせず、何もできずに見送る。
そして、戦慄した。
「……これは」
同じような現象が、『高野豆腐』以外の怪物全てに起きていた。『亀』も、『クジラ』も、中心街で暴れていた『翼』も、微動だにせず、地面をなめらかに移動している。
そして……その中心にいるのは、『高野豆腐』。
この状況が何を意味するのか、コノハが理解するのにそう時間はかからなかった。
（まずい……このままでは、こいつらが合体してしまう！）
どうにかして止めなくてはならない。だが、今ここで電灯から手を離してしまっては、この暴風に飲み込まれ、挙句の果てには『高野豆腐』の体内に取り込まれて死んでしまうだろう。だが、こいつらにある程度威力を発揮する〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟を放つには、両手が空いていなくてはだめだ。
コノハが悩んでいる間にも、怪物どもはどんどん互いの距離を縮めていく。どれか一体を止めたところで、彼らは先に何体かで合体し、残った一匹を最終的に取り込むだろう。となると、考えられる最善の手段は、『一網打尽』。
……果たして、それができるほどの力が自分にあるだろうか。何度か巨大射撃を放ったこともあり、魔力にはあまり余裕がない。そもそも、まだまだ半人前の私如きの『影響力』で、こいつらを一度に倒せるとは到底思えない。
しかし。だからといって黙って見ているというのは、やはり何か違う。できないからやらないなんて理屈は、元々彼女の性に合わないのだ。壁があったら、とりあえず自分の全力を出してぶつかってみる。はね返されても、も

う一度ぶつかる。そうして今まで乗り越えてきたのだ。
「今度だって……やってやる！」
突如、五体の怪物を囲むように、桜色の光の球体が、輪になっていくつも出現した。それらは、〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟と同じように、だんだんと巨大化していく。
今のコノハに使える、最大の威力を持つ魔法。対象を中心に円を描いて座標を指定し、その円周上に大量の〝収束型殲滅射撃（デアボリック・カノン）〟を発生させる。
言うなれば〝収束型広域拡散殲滅射撃〟。その名は――
「〝万物破却せし桜花の雷（オリハルコン・オマージュ）〟ッッ！！！！！」
号令と共に、全ての射撃が怪物たちに放たれる。光の槍が、罪深き獣を幾度も穿つ。
断続的に爆炎が上がり、彼らの姿は黒煙に包まれた。うめき声が聞こえる。かなりの手ごたえがある。
残る魔力をほぼ全て使い切ったのだから、それくらいの成果は得られないと意味がない。
風は止み、最後の一かけらの魔力で、コノハはゆっくりと道路に降り立った。まだ安心はできない。視線は外さない。
煙が薄れ始めた。そこに、倒れた五体の巨獣の姿を期待する。これで、終わってくれれば。終わってくれ。いや、終わる！
コノハが念じる中、ついに煙は晴れた。そして、そこにあったのは、無残な姿となって転がる怪物たち……。
と、いう結果だったなら、どれだけ嬉しかったことだろう。
「う……そ……」
それは、『絶望』そのものだった。『ティラノサウルス』の二倍ほどにもなる、想像を絶する巨体。世界で最も有名な恐竜をベースにしたその身体からは生えるのは荘厳な二枚の翼、そして歪な四本の人の腕、尾は海洋哺乳類の如くヒレと化している。
天、地、海の全てを制した、生物の究極形態とも言えるその姿に、コノハはただ圧倒されるばかりだった。
『グ　ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ』
怪物が咆哮する。先ほどの『高野豆腐』すら凌駕するその威力に、魔力が枯渇したコノハは、なすすべもなく吹き飛ばされる。
「があっ！！」
防音壁に激突し、落下しないままめり込む。
咆哮を止めた怪物は、その重厚な脚を持ち上げ、やはり『中心街』へと向かう様子だ。だが、それに抵抗することは、もうコノハにはできなかった。
滅びの序曲にして終極。そのメインアクターが、今やっと動き出した。

□

「ここです！　そのマンホールです！」
「お、これか！」
地下鉄の非常口から地上に出た吉野たちは、ようやく最終兵器の在処（ありか）とおぼしき場所にたどり着いた。
『翼』が暴れ狂う中を走って行くのを覚悟しており、無論はじめは地上は想定通りの状況で、ガレキと豆腐が降り注ぐ道路を全速力で駆け抜ける羽目に遭ったのだが、どこからか巨大な咆哮が聞こえた途端に、『翼』がピタリと動きを止め、どこかに移動していったため、後半は安全にここまで来ることができたのだ。
ただ、気がかりなのは、『翼』と戦う恵奈の姿が見えなかったことだ。……やはり、一人で戦わせるなど無茶だった。
が、後悔していても始まらない。彼女は自分の持てる最大限の力を発揮して、そして敗れたのだろう。ならば、その遺志（死んだとは限らないが）を受け継がなくてはならない。とりあえず、最終兵器で奴らをぶっ倒すだけだ。
「街の発展度とは裏腹に、旧式のマンホールだな……いや、これは都合がいい。何か、金属製の棒状のものを持ってきてくれないか？それで開けられる」
「分かりました！」
吉野が頼むと、理人は快諾し、いずこかへ走り去っていった。
「気をつけろよー」と見送った直後。突如、再び大音量の雄叫びが、彼らの耳を穿った。
『グ　ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ』
「っ！？　こ、今度は何だ！？」
吉野は叫ぶが、それは咆哮に打ち消され、アヤメには伝わらない。
あまりの衝撃に、高層ビルの窓ガラスは次々に割れ、彼らの頭上に降り注ぐ。
言葉で伝えようにも咆哮に打ち消されて聞こえないので、行動で示すことにした吉野は、すぐさま近くの割れたショーウインドウから、アパレル店だったであろうもぬけの殻のテナントに逃げ込む。すると、瞬時に理解したアヤメも、そこに走り込んできた。

数秒の後、咆哮は収まった。
「大丈夫？　ケガはないかい？」
「少し、頬を切ったが……支障はない。大したことはない」
アヤメは不敵な笑みを浮かべる。
「そうか、ならよかった。理人くんが来るまで、しばらくここにいようか」
「ああ」
無愛想にアヤメは返す。が、こういうところも彼女の魅力のひとつなのだろう。
破片の降る、ガシャンガシャンという音が止まったので、吉野は一度外の様子を確認しに外へ出る。
最初に聞こえた咆哮でもガラスが吹き飛ぶ現象は起きたが、その時の破片や『翼』が暴れていた時のガレキなども合わさって、道路は惨憺たる有り様だ。足の踏み場もない……とまでは言わないが、ガラスをひとつも踏まずに先ほどのマンホールの場所まで戻るということはまず不可能だろう。
（マンホール……で思い出したが、アーネストもなかなかにユーモアのセンスがある男だ。最終兵器への道のりの暗示が、〝パンドラの匣〟とはな）
ふと、そう思う。
ゼウスが全ての禍を中に入れて人類最初の女性パンドラに渡したとされる、有名なあの〝パンドラの匣〟は、本来『箱』というより『つぼ』のような形をしていたらしい。空になったその箱の中には、最後にひとつ『希望』が入っていたという。つまり、『ここに最後の希望がある』ということを回りくどく伝えるメッセージだったわけだ。普段から神話などに興味を持って調べている俺でもなければ、誰がこんな精緻な趣向に気づいただろうか。
苦笑しながら大通りに出て、辺りを見回した吉野は――北東部に目をやった時、言葉を失った。

とてつもなく巨大な、一頭の白い怪物が、立ち並ぶビルのまだ遠くにいる。端的に言うと、ティラノサウルスに翼と人の腕二対とクジラの尾を融合させたような、おぞましい姿をしたそれは、こちらに向かって、ゆっくりと歩み寄ってくる。
本当に、アーネストの言う『最終兵器』は、こいつに届くのだろうか――そんな思考が、ふと吉野の頭をよぎる。
あまりにも、それは巨大すぎた。おそらく、この世界に存在するどんな建造物よりも大きいのではないか。雲まで届くような高さとはまさにこのことを言うのだろう。
「ん？　どうした、吉野………えっ」
棒立ちになった吉野を不思議に思ったアヤメも、テナントから出てきて彼の視線をたどり、そして同じように、あんぐりと口を開けた。
ずしん。ずしん。奴の進むスピードは遅い。しかし、それが逆に威圧感を増していた。滅びへのカウントダウンのようで。
もう、ダメなのか……そんな空気が、二人の間に漂い始めた時。
『グ　ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　！？』
「！？」
二人は、いや怪物すらも、度肝を抜かれる出来事が起きた。
突如、怪物の左胸で、大爆発が起きたのである。巨大ながらも一種の神々しい美しさを持っていた怪物の身体が、バランスを崩し、ゆっくりと倒れる。
一体何が起きたのか。唖然とする二人の前で、黒い爆炎が形を変えていく。時間をかけて、おぼろげに形成されたそれは……西洋の龍の姿をしていた。
『GOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA』
雄叫びをひとつ放って、それは霧散した。そして、爆発によってできた穴から、黒い影が文字通り飛び出したのを、吉野は見逃さなかった。
「ふふ……ははは……やった……やったぞ……！　やった！　死んでなんか、いなかった！」
確認しなくても、直感的に分かる。あれは、彼女だ！
「すいませーん、遅くなりました……って、何じゃありゃ！」
「おう、待ってたぜ！　さ、早く貸してくれ！　俺たちも、頑張るぞ！」
タイミング良く戻ってきた理人から、吉野は強引に鉄パイプを奪い取り、マンホールの穴にさしこむ。少し踏んばると、てこの原理でそれはすぐに外すことができた。
「さあ、行くぞ！」
「はい！」
「……ふっ」
薄暗く湿った希望の道を、彼らは歩きはじめた。

□

「……見ないうちに、大きくなったわね」
『中心街』の外れ、上空数百メートル。爆心から飛び出した黒い影――すなわち怪原恵奈は、倒れた怪物を冷徹な目で見つめた。

彼女の外見は今、気を失った時とは少し違う。全裸に近かった上半身が、黒い焔の兜、籠手、そして鎧でがっちりと覆われているのだ。

道路に転がっていた彼女は、先ほどの『高野豆腐』による吸収のタイミングで、怪物の身体の中に取り込まれてしまっていた。四方八方豆腐に覆われて息が詰まり、意識を取り戻した彼女は、再び『黒燄煉劫儛』、それも最終形態を発動させ、怪物の身体からの脱出に成功したのである。

最終形態　〝狂戦士〟。触れるもの全てを燃やし尽くす、まさしく「攻撃は最大の防御」という言葉を体現したような、自らを最強の盾にして最強の矛へと変える鎧。焔のエネルギーを最大限に蓄積し、解放することによって鎧を爆発させる『滅龍轟哮』は、実に有効範囲半径二百メートルを誇る。

しかし、強すぎるエネルギーにはやはりそれなりの代償がつきものである。この鎧を維持するためには、発動時以外にも、十分に一度、追加で記憶を支払わなくてはならない。おまけに、『滅龍轟哮』を発動させるのにも記憶がひとつ消費されてしまう。最高クラスの攻撃力と引き換えに最大の代償を支払わされるという、言ってしまえば燃費の悪い形態だ。だからこその『最終形態』なのである。

といっても、この鎧に直接攻撃を加えられない限りは、こちらからの攻撃手段は籠手を装着した両手によるパンチしかないというのも難点だ。記憶の消費に歯止めをかけなければ範囲攻撃も可能となるが、それ以外では完全に近接戦闘に特化した武具。正直に言うと、このデカブツに対して使うのは下策だ。

それでもこの鎧を纏ったのは、単にこの戦いに対する恵奈の覚悟を示すためである。いかなる代償も払うことに対して躊躇はしないという覚悟だ。自分ひとりと世界ひとつを天秤にはかけられない、というのは先ほど自分で出した結論だ。

だから――わたしは、その結論に殉じても構わない！

「焼べるは我が命、熾るは我が怒り、燃ゆるは我が魂……全てを灼き尽くし、断ち斬り、灰燼へと帰す煉獄の焔よ！　幾重にも揺蕩う服膺の一欠片を喰らい、今こそ、我が命に応えよ！」

本日三度目の詠唱を終えた彼女の右手に現れたのは、またしても〝偃月刀〟だ。だが、今回はこれで終わらない。

「焼べるは我が命、熾るは我が怒り、燃ゆるは我が魂……全てを灼き尽くし、断ち斬り、灰燼へと帰す煉獄の焔よ！　幾重にも揺蕩う服膺の一欠片を喰らい、今こそ、我が命に応えよ！」

四度目の詠唱。左手に、〝槍〟が現れる。だが、まだ彼女は詠唱を続ける。

「焼べるは我が命、熾るは我が怒り、燃ゆるは我が魂……全てを灼き尽くし、断ち斬り、灰燼へと帰す煉獄の焔よ！　幾重にも揺蕩う服膺の一欠片を喰らい、今こそ、我が命に応えよ！」

五度目。突如、鎧の肩口から、炎でできた二本の腕がにょきりと生える。そして、その手には〝双剣〟。

「焼べるは我が命、熾るは我が怒り……」

六度目。さらに一本、右腕が生え、その手に現れるのは、死神が持つような『狩鎌』。

「焼べるは我が命、熾るは我が怒り……」

七度目。さらに左腕が生え、その手が掴んだのは、全長三メートルほどにもなる、分厚く巨大な両刃の『剣』。

そこで装着を終えた恵奈の外見は、女神と言うよりも阿修羅に近かった。六本の腕に五種類の異なる武器を握った姿は、まさしく武神。しかし、禍々しきその風貌は、やはり彼女が異形に類するものであることを色濃く示している。

これこそ、『最終』のその先、言わば恵奈の『終極』の形態。全ての武器を同時に召喚し、同時に扱うという、彼女の真価。

「『黒燄煉劫儛』　全形態　〝究極戦女神〟」

□

「せいやあああああああぁぁぁぁ――――――ッッッ！！！！！」

恵奈は、未だ倒れたままの怪物に向かって、矢のように飛んでいく。彼女

の武器は、魂そのものである都合上、投擲できないというデメリットもある。魂とはまさしく霊体であり、切り離したりできるものではないのだ。
『グ　ギャ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
　起きあがろうともがく怪物が、口から大量の麻婆豆腐を吐き出す。しかし、恵奈はいとも簡単にそれを躱してみせた。
『逆神の眼』など使わなくとも、この程度なら本来の戦闘力で十分に彼女には回避できる。先ほどの戦闘で喰らってしまったのは、単に予想の範囲外だったからだ。
　今度は、怪物の胸の中心部から豆乳が勢いよく噴き出した。が、それも恵奈をとらえることはできない。終極に達した彼女を止めることなど、この鈍重な怪物にはできない。
　恵奈が「すっ」とすれ違った時には、彼女の攻撃の第一波は終わっている。
『ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ』
　六つの斬撃が、怪物の身体の一ブロックを、ちょうど立方体型に斬り落とした。落下する最中、それは無数に斬裂させられ、燃え尽きて地に堕ちた。が、怪物も負けっぱなしではない。すぐに再生し、やっとのことで立ち上がる。
　――その頃には、攻撃の第二波が終了している。
『ギャ　ア　ア　ア』
次に崩れたのは左足。バランスを崩し、再び怪物は倒れかける――が、またしてもどうにか再生し、簡易的な足を生成して持ちこたえた。
　――と思ったのも束の間。彼女は、怪物の首筋を既に狙っている。「せ　いや　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」
斬る。斬る。斬、斬、斬、斬、斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬。数十メートルに達する首を、削り、喰らい、灼き尽くす。
　このままノンストップで、全て全て全て消し去ってやる。跡形も残さない。完全にこの世から抹消し
「ひゃううう！？」
と、一心不乱に斬り続けていると、怪物の思わぬ反抗に遭う。
　悲鳴をあげながら振り返ると、彼女の唯一の弱点――鎧に覆われていない蛇の下半身が、切り口が変形した白い腕に掴まれている。
「いやあああああああ！」
　急いで豆腐の腕を切り刻む。が、再生力だけは無駄に高いこの野郎、すぐに別の腕で尾の先をつかみにきた。
　これも斬ろうとしたが、その直前で尾を振りあげられ、つられて身体も上方へ。翼でのコントロールは効かない。
　そのままぶんぶんと振り回されて、近くの高速道路の方へと投げ飛ばされた。
「が、あっ……」
　防音壁を貫通し、恵奈は地面に転がる。すぐさま反撃しよう、と、再び宙に戻ろうとしたとき、ふいに目に入ったものがあった。
　少し離れたところ。防音壁が不自然にへこんでいる場所がある。何となく気になって見てみると、そこには。
「……あら…………」
　無気力な表情で、壁にめり込んだ一人の少女が、怪物の方を見つめていた。
　微かに、人ならざる世界に踏み込んでいるのが感じ取れる。おそらく魔導師だろう。あの怪物ども相手に善戦していたが、魔力切れで力尽きたというところか……前世由来無しの超能力者といい、今日はまた化石化しかかったものによく会う。
　助けてやる理由はない……と言いたいところだが。彼女もまた、この世界を救おうという同志のひとり。ならば、助けないわけにはいくまい。
〝槍〟を脇の下に挟み、左の手のひらを尾で斬りつけて、出血したのを確認し、急いで彼女のもとへと向かう。
「もしもし？　だいじょうぶ？」
　虚ろな表情に呼びかけると、想像通り覇気の無い声で、少女は答えた。
「あ……あなたは……」
「通りすがりの戦女神よ。安心して、別に迎えに来たわけではないわ。むしろ、その逆。……説明している暇はないから。とりあえず、飲みなさい！」
「うぷっ！？」
　問答無用で、恵奈は少女の口に左手を押しつけた。こぼれないように、確実に、血液を流し込むために。
「……げほっ、げほっ！　い、いきなり、何するんですか！」
「よし、これで大丈夫。あなたの枯渇した魔力は、しばらくすれば完全に復活するわ。あの怪物を倒したいのでしょう？　わたしを、信じなさい」
　力強い恵奈の言葉と表情に、不満そうではあるものの、少女は無言でうなずいた。
「それじゃ、わたしは戦いに戻るわ。本当に、あと、もう少しなのだけど、やっぱりわたし一人では荷が重そうなの。今、街に『最終兵器』を準備して

くれている子もいるのだけれど……それがどういうものなのかも、正直のところ分かっていないしね。
今からわたしは、アレを街の中心部まで誘導するわ。気が向いたら来てちょうだいね」
早口でそれだけ伝え、恵奈は再び飛び立つ。怪物はちょうど、恵奈が死に物狂いで切り刻んだ首筋の再生を終えたところだった。
恵奈は、今度は怪物の鼻先まで飛び、その口元を斬りつける。眼や鼻、耳と言った器官は確認できないが、感覚的に頭部のどこかで敵を感知している気がしたからだ。
見事に挑発に乗った怪物は、恵奈を追って走り始めた。
「……え」
そう、『走り』始めたのである。これは恵奈にとってかなりの誤算だった。今まで鈍重な動きしか見せてこなかったこの怪物が、まさかスピード感のある動きができるとは思っていなかったのだ。まあ、本来のティラノサウルスも、時速五十キロ程度では走ることができたというが……どうやら、こいつも例外ではなかったらしい。
いや、そんなことを言っている場合ではない。こいつと恵奈では、明らかに大きさの差がありすぎる。飛ぶと走るでは、もちろん走る方が速いのだろうが、こいつに関しては例外だ。いくら距離を離しても、その巨体ですぐに差を縮められてしまうことだろう。
街の中心はもう近い。あと二百メートル。あと百メートル。あと五十メートル。あと二十五メートル。……よし、今だ。
街の中心に達した瞬間に、恵奈は思い切って高度を上げた。怪物は見上げて追う。が、ここまで来れば基本的に陸生生物の性質上、捕まえることはできないと言える。
……その過程が現実になれば、どれだけよかったことか。
「！？　う、嘘でしょう！？」
なんと怪物は、二枚の翼を羽ばたかせ、宙に浮いたのである。
走るまではまだしも、まさか飛べるとは思わない。
恵奈は、ひたすらに上昇していくしかなかった。曇り空をつきぬけ、成層圏へといよいよ到達しようかというところまで来ても、怪物はまだ追ってきた。
成層圏突入の衝撃で焼き殺してやろうか……とも思ったが、自分の身の危険も考えて断念する。
結局彼女が選んだのは、降下だった。怪物を十分な距離にひきつけ、今度は一気に落下するように空を滑り降りる。
落下しながらも、吉野の顔が頭をよぎった。果たして彼は、ちゃんと働いてくれているのか？　本当にちゃんと最終兵器を探しているのか？　疑念を抱かずにはいられない。あせっているからだろうか。
やっとのことで、彼女は地上に戻る。質量の大きいものが速く落下する……という物理法則に抵抗したのか、怪物は律義にそのあとに続いて降りて来た。
「はあ、はあ」
思わず息を切らす。しかし、瞬時に気を取り直し、全ての武器を構える。
「……せいやああああああああああああ！！！！！！！！」
神速の刃が閃き、巨大な体にいくつもの細かい風穴を開けた。だが、それらはすべて、瞬時に再生されてしまった。先ほどから少し感じていた事だが、こいつは合体してから再生力がかなり向上している。足を吹っ飛ばしても簡易的に再生して持ちこたえた時は、さすがに肝を冷やした。
だが……それでも、わたしはあきらめない！
「『永龍爛舞（ウロボロス・アラウンド）・全（オールフェイズ）』！！！！」
恵奈が叫ぶと、全ての武器が大きく燃え盛った。
全形態の利点はここにある。本来、武器の種類による固有の特殊能力であるもの（例えば〝双剣（クロスソード）〟の『神速』）を全ての武器に同時に付与し、同時に〝龍撃〟を発動させることができるのだ。
『神速』を付与された刃たちが、怪物を切り刻む。再生よりも速く。より速く。もっと速く。
ここまでにどれほどの斬撃を放ったのか分からない。でも、まだ足りない。振り返らず、ただひたすらに斬り続けるしかないのだ。
しだいに、刃の軌道に散った火の粉が、形になって集まってきた。龍の舞が始まる前兆だ。まだだ、まだ足りない。もっと速く、もっと
と、集中し始めた時に限って、こいつは水を差すのである。
「……ひゃんっ！」
再び、尻尾を掴まれた。気がつけば、怪物の身体のかなり奥深くまで来てしまっていた。同じ手は食わない……と思ったものの、今度は振り回されず、そのまま地上へと投げ飛ばされた。
「……まったく、どれだけわたしの下半身に興味があるのよ」
さすがに二度目は地面に激突することはなく、どうにか翼で踏ん張り、空中にとどまることができた。が、これで『神速』の効果は消失してしまう。〝龍撃〟は途中で邪魔が入った場合、その特殊効果が停止、及び技が中止されてしまうのだ。

現時点で削ったのは、左半身。早く態勢を立て直さなければ、また再生されてしまう。
そう思って、戦闘態勢に入ろうとした時。ふいに、頭上で大きな声がした。
「ど、い、て、く、だ、さぁ――――――いっ！！！！！！！！」
声の主を確かめるより先に、恵奈は反射的に空中を後退する。直後、
「〝万物破却せし桜花の雷（オリハルコン・オマージュ）〟ッッ！！！！！」
恵奈が気付かぬうちに怪物を取り囲んでいた桃色の光の球が、奔流となって怪物を貫いた。
『グ　ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ』
究極生物は苦悶の声をあげ、爆炎に包まれる。
今度こそ仕留めたか？　と、コノハは少し期待する。謎の女性の血を飲んだことで魔力が全快し、先ほどよりも規模の大きい〝万物破却せし桜花の雷（オリハルコン・オマージュ）〟を放つことができた。爆炎もさっきより大きい。
だが……煙が晴れても、怪物はかろうじてそこに立っていた。身体のあちこちに風穴を開けられ、心臓らしき臓器から赤黒い液体（麻婆豆腐）が流れ出していても、奴はまだどうにか命を保っている。
「……これでも、ダメか……」
もう一発喰らわせてやろうか。できる事ならそうしたいのだが、残念ながら〝万物破却せし桜花の雷（オリハルコン・オマージュ）〟は連射が効かない。一度に大量の魔力を消費するため、残りの魔力にまだ余裕があったにしても、それとは別に、システムの冷却に時間がかかりすぎるのだ。
もしこれが連射できたなら、あの怪物などすぐに倒せている。おそらく数発で南無三だ。が、現状使えるのは一発のみ。結果、相手に大ダメージを与えてもすぐに再生されてしまい、ただ魔力だけが無駄になっていく。
恵奈の神速剣もコノハはちらっと目にしていたが、彼女があれで勝てるとも到底思えない。再生のスピードを追い越すほどの速さで敵を切り刻むことは不可能に近い。となると、残る手段は、やはり大質量の収束攻撃しかない。
怪物の生存を確認し、またも斬りかかろうとしていた恵奈を、コノハは呼びとめる。
「ちょっと、おばさーん！　そのまま切り刻み続けても意味ありません！　何か、範囲攻撃はないんですかー！」
初対面に近い人間（厳密には人間ではないが）に対しては些（いささ）かフレンドリーだな、と恵奈は少し面食らったが、同じような性格の者が我が家にも存在している事を思い出し、大きな声で返答する。
「ないというわけではないけれど！　どれも、一撃でこいつを葬り去るには至らないわ！　わたしにとっては、これが最善の策なの！」
恵奈の答えを聞いたコノハは、空中で頭を抱えた。
「えー！　じゃあ、どうすればいいんですかー！　私も、今以上の威力の技はありませんよー！」
「そうなのー？　……困ったわ」
再び手詰まりの色が強くなってきたころ、怪物は再生を終える。何度目かの咆哮が、街に響き渡る。
少し考えた後、恵奈はコノハに呼びかけた。
「ねえ！　さっきの技、もうそろそろ撃てるかしらー？」
「……え？　いや、まだあと数分は無理ですー！　今は、飛び回るのと通常の射撃を放つ以上のことはできませーん！」
「そう？　分かったわ！　じゃあ、撃てるようになったら教えてちょうだい！　それまでは、極力無駄な魔力を使わないように逃げ回って！　わたしに作戦があるから！」
「……はい！　分かりました！」
互いにうなずき、彼女らは二手に分かれて飛ぶ。
何事もなかったように動き出した怪物は、口を大きく開く。
「……麻婆豆腐、来ます！」
コノハが叫んだ直後、怪物の口から、赤黒いどろっとした液体が、勢いよく放たれた。間一髪で恵奈が上昇すると、そのすぐ下を大量の麻婆豆腐が流れていった。
そのまま際限なく吐き出され続ける麻婆豆腐の奔流は、恵奈を追って怪物が首を傾けたことで、恵奈へと向かってくる。が、これも恵奈は躱す。
そんな攻防が、時折人を変えて何度か行われた後。
「……ＯＫです！　魔力補充、完了しました！」
「よし！　『せーの』で撃つわよ！」
「はい！」
日々戦いに身を置いてきた彼女らが、言葉抜きに共有した「作戦」とは――互いの必殺技の、同時使用である。これで倒せなければ、自分たちだけでこいつを倒すのは、もうあきらめなくてはならない。
恵奈とコノハが、上空で怪物を挟む形に向かい合った、その瞬間。
怪物を円形に取り囲んで、桃色の光の球が出現する。それと同時に、恵奈の全ての武器・武具が、激しく燃え上がる。
だんだんと大きくなる光球。だんだんと龍の形に変貌していく武器。それらが輝きを、最大限に増した時。

「せーの！」
奔る閃光。迸る黒焔。両者の闘気が解き放たれる。
「〝万物破却せし桜花の雷〟ッッッ！！！！」
「『閻龍破翔・全』っっっ！！！！」
無数の光条が怪物を貫き、七頭の龍が襲い掛かる。
『グ　ギャ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
爆炎が、黒龍が、怪物を喰らい、灼き尽くす。どれだけ足掻いても、もがいても、この火炎地獄からは脱出させない。
（……!ここで、決める！）
燃え盛る炎が、怪物の身体を覆う。七頭もいれば、先の戦いのように体の一部を切り落とされてもさして問題はない。また、コノハの光線が吹っ飛ばした部分の再生も、龍によって防ぐことができる。
完璧な展開だ。もう、こいつを逃がしはしない。今度こそ、世界を救うのだ。
七頭の龍が全て爆散した。龍撃終了の合図だ。が、またしても怪物の姿は、黒い煙に隠されて見えない。
ふたりは切実に願う。この煙が晴れた時、後には何も残っていないことを。元の世界への帰還に向けて動き出せることを。
いよいよ煙が薄らぐ。恵奈も、コノハも、その奥に何もないかどうか、必死に目を凝らして観察する。
そして――
「「……え」」
煙が晴れた時。ふたりは、同時に絶望した。
『ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ』
怪物は、悠然と地に足をつけて、堂々と立っていた。ただ、その姿には若干の変化がみられる。今まで白を基調としていた体全体に、大きなひびが入り、そこから赤黒い液体……麻婆豆腐が滴り落ちている。
「そ、そんな……じゃあ、閻龍が燃やしていたのは、一体……！？」
疑問を持ちかけて、恵奈は怪物の足元に転がるものが目に入り、衝撃を受けた。
黒い炎が燃やしていたのは、薄い湯葉のような物質だった。その大きさは、引き延ばせばその後ろに立つ究極生物と同じほどになるだろうということが見て取れる。言うなれば、この怪物の『皮』のような。

つまりこいつは、炎に侵された部分を脱皮という形で捨て去ることで、自らが焼却されることを防いだのだ。爆発で吹き飛んだ部分は当然のように再生できるから問題はない。コノハたちの渾身の一撃は、ついにこの怪物には届かなかったのだ。
まだだ、まだ最終兵器がある……という気分には、到底なれない。恵奈も、コノハも、ただ呆然と滞空するばかりであった。
『ギャ　オ　オ　オ　オ　オ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』
怪物が天に向かって哮る。それは、この世界における彼（性別などこの生き物には存在しないだろうが）の勝利宣言であった。いや、少なくとも恵奈たちにはそう聞こえた。
我勝てり
誰人も最早我を止める事は能わぬ
この世は我が御代
唯一無二たる我こそは王
我こそは法
我こそは霊長
我こそは世
我こそは、神なり――
そのような言葉が詰まった咆哮だった。
『黒燄煉劫儛』を止めようか――そんな思考が、ふと恵奈の脳内をよぎった。
もう、戦意は虫の息にまで達している。何度殺そうとしても無限に再生するこんな化け物に、わたしが敵うわけがない。はじめからそうだったのだ。これは無謀な戦いだった。自らの力を過信しすぎた。「世界を救う」などと息巻いておきながら、何だこのザマは。
恵奈の体を覆う黒い炎は、だんだんと勢いが弱まってくる。魂の一部であるという事は、その威力は精神の状態に大きく左右されるということ。意識を失えば消えるし、強い感情を持てばより強く燃え盛る。そして……弱気になり始めている今は、炎は消えないものの、その威力は極端に落ちる。せいぜいストーブ程度の熱量だろうか。
ゆっくりと恵奈は下降し、着地した。この後、少し念じれば、この炎は消える。……かなりの代償は支払ったが、仕方ない。勝てないものは勝てない。そう割り切ることもたまには必要だ。さあ、火を消そう――

『あ！　き！　ら！　め！　る！　なあああああああああ！！！！』
と、恵奈が念じる寸前。聞き覚えのある青年の声が、中心街全体に響き渡った。
「え……？　吉野、くん……？」
驚いて辺りを見回すと、……あ、あれだ。高層ビルの壁面外側に備えつけられた、本来はテレビ番組などを放映していたであろう液晶ディスプレイ。咆哮によって画面がひび割れているそこに、吉野の顔がでかでかと映っていた。
『恵奈さん！　そしてそこの魔法少女！　あきらめるのはまだ早いです！　いや、あきらめてもらっては困ります！　何せ、この世界の最後の希望は、あなたたちなんですから！』
「……え」
「……？　最終兵器があるんじゃないの？」
吉野の言葉に、恵奈とコノハは首をかしげる。
すると、モニター上の吉野が、「えへん」と咳ばらいをした。
『えー、これだけ言っても分からないと思いますので、一から説明しますね。まず、俺たち……あ、さっき、理人くんとアヤメちゃんという少年少女に出くわしまして。今は彼らと行動を共にしている形です』
理人とアヤメの名前を聞いて、恵奈は少しホッとした。彼らは、少し気がかりだったのだ。
『で、俺たちは、数分前にここ、最終兵器のありかに到達しました。ごていねいに説明書まで置いてありましたよ……で、さっそく使おうと、その説明書をぱらぱらとめくってみるとですね。衝撃の事実が発覚したんです。
……実は、『最終兵器』は、それ自体が兵器であるわけではなかったんです』
「……？」
再びの意味深な言い方に、二人はさらに首をひねる。
『あ、「意味わかんない」って顔してますね。大丈夫ですよ、ちゃんと説明します。
簡単に言うとですね、アーネストが用意した最終兵器は、「次元転送装置」です。別の世界にあるものを転送してこられるという優れものです。ただ、その転送されるものには、ちょっとした制限がありまして。「設定した世界に存在する最強の武器」のみを、指定した座標に送ることができるんですね。つまり、最強の武器は送れますが、食料などの救援物資は送れないということです。
しかし、正直ここに来たほとんどの人の世界で一番強い武器なんてのは、おそらく戦略級核兵器じゃないかと思うんですね。そんなもの、送られてきたところでどうしようもないでしょう。となると使えそうなのは、必然的にファンタジー世界の住人の武器となるわけで。この時点で、選ばれるのは恵奈さんとそこの魔法少女ちゃん、そしてファンタジーに片足を突っ込んでいる俺だけになります。ですが、俺は兵器の使い方なんてわかりません。あくまで俺は、普通の大学生ですから……。
最終的に、この兵器を使いこなせるのは、恵奈さんたちしかいないんです。なので、今からそっちに武器を転送しようと思います。どんなものが出て来るかは……すいません、正直ぜんぜんわかりません。でも、必ず役に立つはずです！　さっさとその白いのぶっ潰して、もとの世界に帰りましょう！　では！』
そこで、ぶつりと映像は途切れた。
「……ふふ。うふふふふ」
「……あはは。あはははは」
吉野の気さくさに、恵奈とコノハは思わず笑いがこみあげてきた。彼に会うと、なぜだか楽しい気持ちになる。全高二キロに及ぶ怪物が目の前で街に向かって闊歩していようとも関係ない。いるだけでなぜか元気になれる。これもひとつの才能といえるだろう。さっきまでの絶望感が、彼の顔を見ただけで、ぱっと消えてなくなってしまったのだから。
「そうだわ。まだ、負けてなんかいないじゃない。わたしは何をあきらめていたのかしら。まだ、全力も出していないし、大きなケガだってしていない。おまけに、今から吉野くんが最強の武器を送ってくれる。これで勝てないはずがないわ！　そうでしょ！」
「……はい！　なんだか私、やれる気がしてきました！」
全くもって根拠のない自信である。だが、それが時に人を救うこともあるのである。
互いに少し離れたところで向かい合っていた二人は、目を合わせ、にっこりと笑い合った。
「絶対に、勝ちましょう！」
「……ええ！」
未だに互いの名も知らないふたり。だが、その間には、すでに強固な信頼関係が築き上げられていた。たとえ年は離れていても、彼女等は明確に「戦友」であった。
しばらく続いた和やかな雰囲気は、ふたりの頭上に現れた魔法陣によって、ぴしっと引き締められた。

『転送』が始まったのだ。「次元転送装置」という未来感あふれるネーミングではあったが、どうもアーネストという科学者には魔術の心得もあったようだ。
　コノハの真上に現れた魔法陣は、真下に移動して、彼女の身体は魔法陣を通り抜けていく形となった。
　そして、彼女の左眼に現れたのは、極めてシンプルなデザインの片眼鏡(かためがね)だった。円形のガラスに金色のチェーン。それ以外の無駄な装飾は一切存在しない。
　それは、『彼』が彼女に残していった、唯一のもの。あまりに突然すぎる別れから、彼女を遠ざけさせてくれる、『彼』の残滓。
　コノハは、すこし懐かしさを感じながらも、それに触れた。すると、
「……！？」
　突如、コノハの頭の中に、イメージが投影された。
　それは、この武器の使用方法と、そのスペックであった。そのイメージの投影が、武器自体によるものなのか、「最終兵器」とやらによるものなのかは分からないが……。
　その解説に従うまま、コノハは『彼』に思いを馳せる。
（武器……最強の武器、か）
　そういえば昔、彼もそんなことを言っていた。自分で武器を考えたから、見てくれと。そう、確か、そんな武器だった。
　コノハが確認を終えた途端に、彼女の腰、そして背中が閃光に包まれた。
　そして、光が止んだ時、そこには色の異なる四本の剣が提げられていた。
　腰に二本、背に二本。それぞれ、白銀の剣と黒い剣、夕暮れ色の剣とソラ色の剣だ。
　白銀の剣はヴァーチャー、黒い剣はシュバルト。
　夕暮れ色の剣はラグニック、ソラ色の剣はエフェス。
　それぞれに特殊能力がある……というわけではなかった。正直に言うと、スペック的にはただの剣と大差ない。だが、あの日の『彼』にとっては、最強の武器だった。
　一方、恵奈の頭上に出現した魔法陣から出現したのは、ひとつの円周の四分の三ほどの弧を描くような、鎌のような形の一本の剣だった。光とともに舞い降りるそれを、恵奈は肩口から二本、さらに焔の腕を生やして受け取った。
　すると、彼女の脳内にも、この剣の使用方法と性能、そして剣の名が投影された。
銘(めい)は『ハルパー』。鍛冶の神ヘパイストスが、不破(ふわ)の金属アダマントを用いて鍛造(たんぞう)し、現在は旅人の守護神にして死への旅路の案内者であるオリンポス十二神の一人・ヘルメスの所有物となっている、伝説の剣である。
　この剣が最強の武器たる所以(ゆえん)は、「相手を破壊する」という武器の最重要の目的を、その能力が究極的に達成しているからだ。
　万物に祝福を授け、いろいろな力を付与することに長(た)けたヘパイストスがこの剣に与えたその能力とは、端的に言うと「因果の創造」である。
　例えば、この剣を遠くの建物に向かって「切れろ」と思いながら振ったとする。するとその建物は、一切刃に触れられることがないまま、距離があるにも関わらず、大きさなども一切関係なく、刃を振った軌道に沿って、きれいに切断されるのである。
「剣を振る」という行動に起因し、「対象の切断」という全く関係のない結果が創造される。これは概念であり、剣(つるぎ)自体の能力による世界の法則の改変であって、その力に抗える者はどこにも存在しない。
　正直な話、これを一振りすればあの怪物は消滅する。ここに恵奈たちの勝利は確定した。
　だが……そんなに簡単に終わらせてなるものか。こいつは、この世界に住んでいた人々から多くの、本当に多くのものを奪った。その報いは、自分たちの全力、持てる全ての力によって受けさせなくては、二人は気が済まなかった。
　二人を無視して中心街へと向かう怪物の背中を見据え、コノハは白銀の剣(ヴァーチャー)と黒の剣(シュヴァルト)を背から抜き去る。
「行きましょう」
「……はい」
　恵奈は羽ばたきを開始し、コノハはその場にゆっくりと浮遊しはじめる。
　よくも手こずらせてくれたものだ、と二人は思った。自分の持ちうるどんな攻撃を喰らわせても再生し、逆に何度か殺されそうになった瞬間もあった。
　だが、それもようやく終わる。
　一直線に、ふたりは飛び出した。
「はああああああああああああああああああああ！！！！！」
「せいやああああああああああああああああああ！！！！！」
　雄叫びをあげて向かってくる二人を感知したのか、怪物は振り返る。

その時にはすでに、怪物の小さな前足の片方が、斬り落とされていた。

『ギャ　ワ　オ　オ　オ』

くるりと空中で怪物に向きなおったのはコノハである。その剣には、白い塊がべっとりとついていた。

そして——もう片方の前足も、『じゅわっ』という、物が焼ける音と共に斬り落とされた。

もちろん恵奈だ。彼女の〝偃月刀（ハルバード）〟が光の如き速さで閃（ひらめ）いたのを、コノハは見逃さなかった。

驚き、悶えながらも辺りを見回す怪物。が、見たと思った時には、すでに彼女たちの姿はそこにない。

目で追う事が難しいほどのスピードだった。脇腹のあたりにいたと思えば頭上に。眼の前にいたかと思えば尾の先に。それほどの速度で彼女たちは斬撃を加えていく。脱皮によって向上した機動力を生かす暇すら、彼女らは与えるつもりはなかった。

コノハは、実に器用に四本の剣を操っている。白銀と黒でクロス状に斬撃を放ったかと思えば、次の瞬間には空色と夕焼け色を持っている。大ぶりの斬撃の反動を生かして剣を鞘に戻し、反対側の剣を抜いているのだ。

だが、八本の腕で七本の刃を操る恵奈も負けてはいない。圧倒的な数による絶え間ない斬撃で、怪物には決して反撃のスキを与えない。一心不乱に敵を切り刻むその様は、まさに〝戦女神〟。が、最強の剣ハルパーだけは、使わずにとっておいているようだ。

黒と桜色の光が、閃いて、ゆらめいて、その度に怪物が苦悶する。その巨体のあちこちから、斬撃によって豆乳が噴き出す。

永遠にそれが続くかに思われたとき、コノハは叫んだ。

「おばさん！　そろそろ！」

「……ええ！」

恵奈が攻撃しながらも首肯したのを確認して、コノハは唐突に怪物から距離をとった。

そして、持っていた夕暮れ色と黒を、宙に放った。

「……はあっ！」

気合と共に、すかさずコノハは残る白銀と空色を鞘から抜き放つ。そして、柄を上にして、地面と垂直に、磔にされたイエスのような態勢でそれらを持った。

すると……先ほど放り投げた二本の剣が、ちょうど柄の位置に、垂直に落ちてくる。『ガキン』と小気味よい音を立てて、それぞれ白銀と黒、夕暮れ色と空色とが、一つの武器となった。

「……はああああああああああああああああ！！！」

それらを手にしたコノハが向かってくるのを確認すると、恵奈はすぐさま攻撃を止め、その場を離れた——直後、恵奈の頬に、スパッと切り傷が入った。

「は　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」

コノハを中心に、斬撃の嵐が巻き起こっている。まさに疾（はや）きこと風の如く、いや竜巻の如くといったところだろうか。縦横無尽にかまいたちが、そしてコノハ自身も、怪物の巨体を駆け巡り、そして跳躍する。

断つ。斬る。そして絶つ。風が、刃が、豆腐を切り裂いてゆく。

ちょうど自らの巻き起こしたかまいたちの嵐をなぞるように、上から下へ、怪物の周りを、斬撃を放ちながらぐるぐると高速で飛ぶ。だんだんと、怪物の胴体は削れ、脆弱になっていく。

『ギャ　オ　ワ　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア　ア』

喘鳴（ぜんめい）と共に、怪物の前半身と後半身が真っ二つに分断された。スタン、とコノハは着地した。

『ギャ　ウ　ウェ　エ　エ　、　グ　エ　エ　エ　エ　エ　エ』

ズズズ、ズズズと音を立てて、怪物は地を這いずる。再生はもちろん始まっているが、ここまで大規模なものとなると、少々時間がかかる。

そのうちに、怪物の真上には、恵奈が全ての武器を構えて滞空していた。

「ら　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ」

黒き焔が滾（たぎ）る。それぞれの武器が、龍を宿す。大剣は護龍、双剣は永龍、偃月刀は闇龍、槍は皇龍、狩鎌は邪龍、そして鎧は滅龍を。

『『『『『GRURRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR』』』』』

炎が勢いを増すほどに、六頭の龍がうなる。全て、目の前の敵を屠る瞬間を待ち望んでいるのだ。

そして、ようやくにして怪物の前半身と後半身がつながりかけた時——

「『全・龍・繍・剣（ドラグヌス・エンブロイ）』！！！！！」

全ての龍がその号令と共に、恵奈のもとから解き放たれた。

『GUWOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA』

『GARUUUUUAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA』

『GUYAOWEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE』

『ＫＹＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ』
『ＧＳＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ』
『ＧＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ』
六つの影が、空を奔る。
護龍（ドラコ）がのたくる。永龍（ウロボロス）が舞（ま）う。闇龍（リンドブルム）が翔（と）ぶ。皇龍（キリン）が駆ける。邪龍（ヤマタノオロチ）が蠢（うごめ）く。そして、滅龍（ファフニール）が哮（たけ）る。
『ギャアアアアアアアアアアア』
龍たちは、一頭ずつ順に、怪物の身体を通過していく。はじめは護龍（ドラコ）が右翼を焼き消し、次に永龍（ウロボロス）が前半身で踊り狂って体表を蹂躙（じゅうりん）し、闇龍（リンドブルム）が左半身を削り取り、皇龍（キリン）が疾走のままに身体全体を通過し、邪龍（ヤマタノオロチ）が全身に食らいつき、最後に滅龍（ファフニール）が、その爆炎で灼き尽くす。
『グオオ……』
轟音が鳴り響き、怪物はその身体のほとんどを、黒によって焼かれ、焦がされ、吹き飛ばされた。もはや立ち上がる力もなく、黒焦（くろこ）げにされた無残な姿で、ぐったりとその場に転がった。
が……そこで、終わりはしない。ぐったりと倒れた怪物の前には、すでに剣を消失させたコノハが、目を閉じてすっくと立っている。
「我、破戒（はかい）を破壊する者也（ものなり）
我、善を擁護（ようご）する者也
我、悪を肯定する者也
我、情に拘泥（こうでい）する者也
我、魔を宿（やど）す者也
我、魔を否定する者也
我、貫（つらぬ）く者也（かし）――」
一言一言、噛み締めるように唱えて、コノハは片眼鏡に手をやった。
「魔眼解放（ハンマーアップ）」
ゆっくりと眼鏡を外す。そして、
「始点設置（スコープオン）」
それを目の前に掲げる。その先に見ゆるはもちろん、炭化して倒れた究極生物。
「魔力収束（トリガーセット）――」
コノハの周りに、桃色の光の粒子が集まり始める。それらは、だんだんとコノハの身体を覆っていく。
ついにコノハが、光の柱となる瞬間。
『想い通す砕身の槍（イアペトス）』……
………発進（ショット）！！」
眼鏡を掲げた軌道に沿って、彼女は撃ち出された。怪物の身体のど真ん中を、光の柱……否、『槍』が貫いた。
全高二キロメートル、全長はそれより長い。だが、そのとてつもなく巨大な体のなかを、彼女はいとも簡単に焼き崩していった。
啼き声を上げようにも、もはや怪物はそのための器官を失った。彼女が過ぎ去った後には、巨大なトンネルのようにくりぬかれた、黒い残骸が残るばかりであった。
だが、怪物はそれでも生きていた。切り刻まれ、焼き焦がされ、貫かれようとも、その再生能力がおとろえることはない。今も、黒く焦げた身体から、新しく白い部分が湧き出し始めている。
だが……これで、最後だ。もう、こいつが蘇ることは二度とない。
恵奈は最後の刃――ハルパーを、高く高く振り上げた。
「数多の未来、幸福、そして命を奪った罪……その裁き、今こそ受けるがいい！　この刃は、我が刃に非（あら）ず！　我が世界による、貴様への断罪の刃なり！」
古風な口上を述べて……恵奈は、もはや瀕死となった怪物に、とどめの一撃を振り下ろした。
「せいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」
気合いとともに恵奈が剣を振り下ろすのに合わせて、怪物の身体は上から音を立てて崩れ落ちた。まるで、巨大な刃で叩き斬られるように。
これこそが『因果の創造』だ。いかなる巨大な敵であろうとも、どれほど遠くにいる者であろうとも、その対象に向かって振るだけで、『斬られる』という結果が付与される。そして、現実にその通りになる。
また、対象が生物の場合、付与される結果は『切断』にはとどまらない。本来、武器とは相手を『殺す』ための道具。言い換えれば、相手を殺せなければ、それは武器ではない。

『切断』とともに、対象の『殺害』。たとえ神であろうとも、この剣に定められたその結果から逃れることはできない。先にも説明したように、この剣は「法則」をこの世界に付与してしまうのだ。この剣の斬撃は、質量保存や万有引力と言った、抗う事のできぬ物理法則と同じものとしてみなされ、適用される世界に存在するどんな存在であろうとも、それを無効にすることはできないのである。

したがって、驚異の再生能力を誇るこの怪物も、ハルパーに斬られては復活することはできない。再生は行われず、ただ『死』という結果が残るのみである。

恵奈が完全にハルパーを振り下ろすと同時に、怪物の身体は爆散した。そして、二度と蘇ることはなかった。

□

「やりましたね、恵奈さん！　俺、心配しましたよ……もう、どうなることかと……ぜんぜん、恵奈さんの姿は見えませんでしたけど」

戦闘の終了を確認した吉野たちは、街に乗り捨てられていた軽乗用車で、恵奈たちのところまでたどり着いた。

人の姿に戻った恵奈に駆け寄ったのは理人である。少し遅れる形で運転席から降りた吉野も走ってきた。アヤメはまだ彼女に対する恐怖が抜けないのか、後部座席で体育座りをして待っている。

走り寄って来た吉野たちを見て、恵奈は怪訝な顔をした。

「どうしたんですか、恵奈さん。ほら、早く白街に行きましょう。みんな、脱出しようと自分たちなりにがんばってるんですよ」

しびれをきらした吉野が、そう言って手をとろうとすると、彼女は反射的にか、それを嫌がるような動きを見せた。

理人と吉野の表情が固まる。それを察した恵奈は、申し訳なさそうに二人を見つめた。

「その……ごめんなさい。今のわたしには、あなたたちが誰なのかわからないの」

「「……えっ」」

信じられない、という面持ちで、ふたりは恵奈を見つめた。

「わたし、『黒燄煉劫儛（レイム・オブ・リブレイズ）』という特殊能力を持っていてね。なんでも破壊できる黒い炎の武器を作り出すことができるんだけど……その武器を作るのには、代償として、記憶をひとつ消さなくてはならないの。その選択はランダムで、わたしに制御できるものではなくて……それを、さっきの戦いでこれ以上ないほど使ってしまったから。多分、それであなたたちのことを、忘れてしまったのかもしれないわ」

「なっ……」

「そ……そんな、ことが」

あるわけがない、と理人は信じたかった。しかし、人ではない存在である彼女の言葉に嘘偽りがあるのかどうか、彼に判別することはできなかった。

吉野も、にわかには信じがたかった。だが、まあ、あれほどの威力を誇る武器なのだから、対価があるのは当然と言えば当然なのかもしれない。……それが「記憶」というのは想定外だったが。

「そんな……恵奈さん……せっかく、また会えた、のに……」

理人はうなだれた。二度と会う事はないと思っていた人に、もう一度出会うことができて、彼は心が躍った。ほんの数分間ほどの付き合いだったが、彼女はこんな俺によくしてくれた。彼女と心が通じ合うのを感じた。

だが、彼女は俺のことを覚えてはいなかった。命を救ってくれたことも忘れていた。それがこの世界を救うための、かなり安価な代償だとしても、頭ではそう分かっていても、心が納得しなかった。

多少のプライドは持ち合わせているので、泣きはしなかった。いや、必死にこらえていた。

「そう、ですか……じゃあ、とりあえず行きましょうか。みなさん、待っていらっしゃるでしょうし」

「うむ、そうだな。あまり俺たちに時間はない」

後ろにいた吉野を先に立て、軽自動車の方へと歩き出す。仕方ない、これ以外なかったんだ。どうせ別れる運命じゃないか。こうしてもう一度姿を見られただけでも幸運というもの

「……なっ！？」

涙目になり始めていた理人の背中に、柔らかく弾力のあるふたつの何かが押し付けられた……いや、それが何かは言うまでもなく分かったが。

「え、恵奈さん!?　な、何してるんですか！」

「……ごめんなさいね……わたしだって、忘れたいわけじゃあないのよ……本当に……だから、今まで封印していた……でも、今回は、今回だけはどうしようもなかった……だけど、やっぱり自分勝手よね……忘れられる方だって、辛いのに……」

理人を抱きしめた恵奈は、そのままおろおろと泣き始めた。

「な、泣かないでください！　恵奈さんに罪はありません！　そうするしかなかったんですから……」

理人は混乱し、どぎまぎしながらも、なんとか彼女をはげました。その混乱の理由が、年上の女性が泣いているという状況ではなく、背中に当たる巨大なふたつの柔らかい物体だったことは、絶対に触れてはならないが。
「……ふふ。優しいのね、あなた」
「え、ええ、まあ……」
ひくっ、としゃっくりをひとつして、恵奈の涙は止まった。もともと理性的な性格をしているため、こういった切り替えは早いのだ。
が……その転換の振れ幅は、もとの感情が大きいほどに激しい。
「なっ……こ、今度は……」
「少し、このままでいさせて。落ち着きたいの」
恵奈は理人を抱きしめたまま、その頭を撫で始めた。
「よしよし……いい子ね……」
「……」
こんな、中途半端に大きくなってしまった高校生を愛でて心を安らげるとは、奇特な人だ。
……それとも、俺が愛玩に類するような見た目をしているとでもいうのだろうか。
「あ、あの……。一応俺、高校生なんですけど……」
少し憤慨した理人は、眉根を寄せて恵奈を見上げた。
が……どうもそれは逆効果だったようで。
「うふふ。そういうところが余計にかわいいのよ」
恵奈は満面の笑みで、ぷにぷにと理人の頬をつつく。
「……からかわないでください……」
「ほら、それも。母性本能をくすぐるのよねえ……まるで、うちの末の息子を見ているみたい。どんどん自爆していく感じが、ねえ……」
「じ、自爆って……」
呆れた理人は、反論をあきらめた。これ以上、何を言ってもこの人には勝てる気がしない。
黙ってそのまま撫でられ続ける。悪い気はしない。まるで、赤んぼうの頃に戻ったような感覚だ。何も考えず、ただ母の胸に抱かれ、甘えていたときのような。
まあ……背中にずっと当たっているふたつの物体に意識のほとんどが持っていかれていることを考えると、赤んぼうとはほど遠いようで近いのかもしれない。
「おーい、二人とも何してるんだー？　早く、白街に向かうぞー！」
「あ、はーい！」

吉野の呼びかけに、理人は大きく返事をして、再び己を抱く恵奈を見上げた。
「……じゃ、そういうことみたいなんで。早く行きましょうか」
「ええ。ありがとうね」
名残惜しさを感じながらも、理人は恵奈の胸から解放された。そして、二人は軽自動車の方へと歩き出した……のだが。
「……あれ。何か、忘れているような気がするのだけれど……」
唐突に恵奈が立ち止まり、後ろを振り返る。すると――
「……あ！　そうだったぁーっ！」
かなり遠くの方に、黄色いコートを羽織った少女が、力尽きて倒れているのが見えた。
「すみません吉野さーん！　もう少し待ってくださぁーい！」
「……仕方ないわね」
結局二人は、軽自動車とは逆の方向に走り出すこととなった。コノハが目を覚ましたのは、それから十分ほど後、車中でのことであった。

□

「よし……これで、終わりだ」
「本当に長かったですねえ……まさか、鍵が最初から僕たちのすぐ傍にあっただなんて……」
「まったくだな」
白街遺跡、塔一階・祭壇の間。木埜と広津は、皿の上に乗った、半分崩れた豆腐をまじまじと見つめていた。
これは、木埜たちがこの世界にやってきた時に、広津が一緒に持ってきたものだ。いっこうに手掛かりが見つけられなかった彼らは遺跡に戻り、先ほど腹が減ったと木埜が食べようとしたのだが、広津は「今日のラッキーアイテムだから」と頑として譲らなかった。結果、ちょっとした取っ組み合いになり、半分が崩れて祭壇の上に落ちた。すると、あろうことかそれが、鰹節やネギと同じ光を放ち始めたのである。
木埜が最後の『鍵』の残りを祭壇に置くと、祭壇のすぐ前の空間が、渦を巻いて歪み始めた。
「「おお――……」」
超常的で神秘的な光景に、木埜と広津は感嘆の声を漏らした。
歪みは少し縮んだ直後、再び大きくなり、その中心には、世に言うタイム

トンネルのような、不思議な次元が渦巻いていた。それは人が三人は同時に通れるほどの大きさまで広がったところで、動きを止めた。
「これはすごいな！　一体、どういう原理なのか……むっ」
興味津々に近づいた木埜の頭に、ずきりと痛みが走る。
すると、痛みと共に、彼の脳内に、いくつかの映像が投影された。
「なんっ……だ……」
「先生、どうかなさいましたか！？　大丈夫ですか！？」
広津が心配そうに走り寄る。が、木埜はそれを左手で制す。
「ああ、問題ない……この祭壇からの呼びかけだ。世界間の移動について、イメージが今、私の頭の中に投影されている」
「なっ……そ、それはうらやま」
「何か言ったか」
「いえ、何でもありません」
残念そうに、広津は目を逸らした。
するとその時、遺跡に入ってきた者がある。
「ワクチンは見つけたわ。そちらの首尾はどう……あら」
「おおー……」
「わ、なにこれ！　すっごーい！　ワープできそう！」
ワクチンを捜しに行っていた、野花・樹・万尋の三人組である。目的のものが入っているであろう大きめのジュラルミンケースは野花が持ち、あとの二人は手ぶらだ。……まあ、妥当な人選であろう。皆、この世界の出口に目を奪われている。
「もう、みんな分かっていると思うが……それが、『門』だ。あまり近寄るんじゃあないぞ、触れただけで転送が始まるからな」
木埜の言葉を聞いて、三人は思わず後ずさる。帰れるのは嬉しいが……今は、まだ早い。
「それじゃあ野花君。人も集まってきたことだし、これからの段取りを確認しないか」
「あ、はい。この後、今いるメンバーだけでもワクチンを打っておいて、コノハちゃんを待ちます。彼女と吉野さんが到着次第、部屋の除菌をしてもらって、それから帰還……という算段ですね」
「うむ、ありがとう」
木埜はうなずく。
「……あ、あの、すみません」
「？　はい、何でしょうか」
遠慮がちに手を上げたのは広津である。野花のオーラに委縮してか、彼の方が年上であるにもかかわらず、敬語を使わざるを得ないようだ。
「その、ワクチンは……ちゃんと、人数分あるんですか？」
おどおどしながら尋ねると、野花の右に控えていた万尋が声を張り上げた。
「それなら大丈夫！　見て！」
「あ、ちょっと！」
万尋は野花の手からジュラルミンケースをひったくり、がばっと開けた。その中に入っていたのは、三十本近いワクチンのびんと、同じくらいの数の注射器、そして注射針だった。
「おお……これは、すごいな……」
広津が讃嘆すると、樹が得意そうに説明した。
「全て、病院の地下室に保管してあったんです。はじめは手分けして地上階を探していたんですが、いっこうに見つからなくって……もうダメか、とも思いましたけど。再度全員で集合して、最後の希望をかけて地下室をさがしてみると、もう出るわ出るわ。ちょうど保管庫になっていたようで。あ、そうそう。感染も早い分、効き目も早いらしいですよ。なんでもたったの一時間でウイルスを全滅させられるとか」
「ほんと、すごいよね。……そういえば野花ちゃん、すっごく怖がってたよねー。『こんなところにあるわけないわ！　早く出ましょう！』って！」
「なっ……ちょっと万尋！　それは言わない約束でしょう！」
意地悪な顔でカミングアウトした万尋に、野花は頬を紅潮させて憤慨する。
「へえ……」
「ほう……」
「……何がおかしいのよ！　ニヤニヤしてるんじゃないわよ！」
広津と木埜も、これには口の端を歪めずにはいられなかった。この、クールビューティ野花が、まさか……。
「まさか、暗いところが怖いなんて思わなかったなあ……」
樹がポロリとこぼした言葉で、野花の怒りは頂点に達した。
「あ、な、た、ねえ――――――っ！！！！！」
「や、やめて野花ちゃん！　ワクチンのびんが！　注射器が！　針が壊れる！」
暴れかけた野花を、万尋と広津が必死で取り押さえる。ちなみに言うと、木埜は隅のほうで「くっくっく」と不気味な笑い声をあげていた。
当の樹はというと、何が悪かったのかも分からず、ただ怪訝な表情で野花を見つめるばかりであった。
「やあ、遅くなってすまない！　これで全員かな？」
そうこうしているうちに、吉野たちも遺跡に到着した。

「わあ……これがゲートですか。すごいですね」
「ええ……わたしもずいぶんといろいろ見てきたほうだけど、こんなのは初めてだわ」
ただ……思ったよりも、人数は多かったが。
天然パーマで童顔の少年、暴力的なまでに身体の、主に胸部の主張が激しい女性、そして中学生くらいの、不機嫌そうな表情の少女が一人。そして、その後に続いてコノハが入ってくる。
「あなたは、一体何をしていたの……」
野花は吉野をじろりと睨む。主に、あの一〇当千から抜け出して来たような女性をちらちらと見ながら、だ。
「決まっているじゃないか、この世界を救っていたんだよ。といっても、実際にあの怪物と戦ったわけじゃないけどな。実動部隊は、そこのダイナマイトボディの御婦人……恵奈さんと、魔法少女コノハちゃんだ。で、俺と天パの理人くんとぶすっとしたアヤメちゃんは、最終兵器で彼らの援助に徹したんだが……詳しい事は、ややこしいから割愛させてくれ」
「そうね……長い話になりそうだもの」
ふっ、と息をついて、野花は全員に呼びかけた。
「それじゃ、皆さん。今から全員、このワクチンを注射していただきますが……自分では難しい方もいらっしゃると思います。ですがご安心ください。その場合は、木埜さんが注射してくれます」
「おい、ちょっと待て。何で私なんだ」
全く予測していないタイミングで自分の名前が飛び出し、木埜は不満そうに野花に問いかけた。
野花は眉ひとつ動かさず、それに答える。
「だって、一番慣れていそうですから。私の分も、ぜひお願いします」
「はあ……分かったよ……」
この娘にはかなわん、と木埜は首を横に振った。
全員の注射が終わったところで、再び進行役の野花が声をあげる。
「さて……次は、コノハちゃん。あなたの出番よ」
「ハイサーイ。除菌、だよね」
なぜ沖縄弁で喋ったのかは分からないが、とにかくコノハは皆の、いや部屋の中心に立つ。すでに塔に入る扉は閉まっており、部屋は完全に密閉されている。
コノハが両手をゆっくりと掲げると、彼女の手のひらから、たくさんの光の粒が涌現した。
「おおー！　きれい！」
「しっ、静かに」
目を輝かせた万尋を、野花は制する。その間に、光の粒は集合し、彼女の両手に一つずつ、桃色の光の球が生成された。
ぐるり、と彼女は辺りを三六〇度見回す。また、その間彼らも、一人ずつ三六〇度その場で回転することを要求された。視界に入っていない背面のウイルスも射程に入れるためだという。
「よし、これでOKだよ。ちょっと眩しいから、みんな目を閉じていてね」
コノハに言われるがまま、皆は目を閉じる。すると、彼女の甲高い声が、石室の中に響いた。
「〝広域拡散射撃〟！！！！」
瞬間、まぶたを閉じていても目がくらむような激しい光が、部屋全体を包んだ。この部屋の全てのウイルスを死滅させるのだから、すさまじい量の射撃が放たれなくてはならないことは、皆薄々気づいていたが、さすがに少し驚いたようで、あちこちから声があがった。
十秒ほどで光は止んだ。彼らが眼を開けても、特に部屋の内部に変化はみられなかった。
最初に、おどおどとした声色でつぶやいたのは、アヤメだった。
「……これで、全てのウイルスは消滅したのか？」
「うん、大丈夫だよ。トオル君の魔眼に、とらえられない敵なんていないのだ！」
コノハは得意げに胸を張る。皆の表情が、微かに綻んだ。
「さて……やっと、私たちは元の世界に帰れるわけだが」
場が和やかな雰囲気に包まれたところで、木埜が口を開いた。
「ここまで来られたのは、みんなのおかげだ。私たちの誰ひとり欠けていようと、この結末にたどり着くことはできなかっただろう。惜しくも、一人の犠牲者は出したが……彼女の命は、私たちが繋いでいこう。泣いていても何も始まらないからな。
ここにいるみんな。本当に、ありがとう」
木埜は深くお辞儀をした。
はじめに激しく手を叩いたのは広津だった。それがだんだんと伝播して、二人、三人、そして木埜を除く十人の拍手が、彼を包んだ。
拍手の間、皆は互いに縁をもった人物と視線を交わした。それが、別れのあいさつの代わりだった。

木埜が姿勢を正し、真っ先に『門』の前に立つ。慌てて、広津も続く。
彼らは振り返らなかった。誰からともなく、皆が彼らの後ろに並んだ。
「では、達者でな。また、縁があったら会えるかもしれない」
それだけ言い残して、木埜は『門』の先に進んでいった。広津も、軽い会釈をして、門に入っていった。
そこからは早かった。誰も、何も口にせず、ただ一人ずつ、『門』に吸い込まれていった。情がないのではない。皆、涙をこらえていたのだ。
最後に、最も小柄なアヤメが『門』の向こうに消えると、『門』にすぐさまヒビが入った。ヒビは瞬きもせぬうちに『門』全体に広がった。そして、
「パリン」という音と共に、『門』は崩れ去った。
あとには、半分につぶれた豆腐が、祭壇の上に残るばかりであった。

□

「ふう……どうやら、やってくれたようだな」
急ごしらえのボロボロの住居で、眼鏡をかけた壮年の男性がつぶやいた。
彼の前には、デスクトップ型ＰＣが一台と、パイプ椅子に座る一人の少年がいた。
「さて、ここからが君の出番だ、新田君。脅威が排除されたあの惑星に、私は今から旅立つ。ワクチンによってウイルスに対する免疫をつけた動物たちを連れて、な。その間に……君には、これを火星に解き放ってもらう」
そう言った男性は、脇に置いてあったアタッシュケースから、一つのシャーレを取り出した。
「人類など私ひとりで十分なのだよ。不死となった私は、人類の究極形に到達したのだ。それまでに生まれた人間とは、全て私を生み出すための布石だったのだ。この薬が完成した時点で、他の人間は全て淘汰してしまおうと思ったのだが……まさか、ワクチンが開発されて、火星に逃げるとは思わなかったよ。
だが、今度は問題ない。ワクチンを作れるような人間は全て私が殺したし、このウイルスだって前のものよりも感染力は強化されている。もはや、誰も私による裁きの鉄槌から逃れることはできないのだ。そして、それを下すのは新田君……君だよ」
パイプ椅子に座った……否、縛り付けられた少年は、何も反論できない。さるぐつわを噛まされ、話すことができないのである。
「おいおい、拒否権などないと言っただろう。君が妙な真似をすれば、私の手元のこのスイッチで、君の頭が吹っ飛ぶことになる。そんな無残な死に方は嫌だろう？
だが……私に従うならば、このただ一人分のワクチンと、地球に戻る自動操縦ロケットのキーをくれてやろう。ほれ、この箱に入れておくぞ。ただ、君が事を為すまで、この箱の鍵は開かないがね。遠隔操作で開けるものだからなあ……電波が届くかどうかは怪しいが、な」
男性は眼鏡をかけなおし、建物の外に出た。そして天を仰ぎ、叫んだ。
「喜べ、世界よ！
我は今日、貴様の僭主に就任する者ぞ！
全ては我が統治し、我が司る！　何人たりとも止めることはできやしない！
この、アーネスト・ウォルフガングを！」
男の拳が、空に浮かぶ水と緑の星を、掴んだ。